

表II-1 静内川河口域の遺跡一覧

登載番号	遺跡名	種別	主な時期	調査歴	報告年	備考
K-05-012	田原8遺跡	遺物包含地	縄文		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-014	温泉沢入口遺跡	遺物包含地	縄文(前期～中期)・ 縄繩文(前半期)		「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-015	ウセナイ遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-016	ロクマップ遺跡	遺物包含地	縄文(中期～後期)・統縄文		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-017	真歌1遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		町教委(1976)	
K-05-018	マウタサップ遺跡	遺物包含地	縄文(早期～中期)・擦文	1957・1959年調査	「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-019	秋田台地遺跡	集落跡	縄文(早期～中期)		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-020	ホイナシリ遺跡	遺物包含地	縄文(中期)・擦文		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-021	シンブツナイ遺跡	遺物包含地	縄繩文・擦文	1952～1954年調査	「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-022	中野7番地遺跡	墳墓	縄繩文・擦文	1962年調査	「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-023	シンブツナイチャシ跡	チャシ跡	アイヌ		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-024	真歌2遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-025	真歌バシカンナイ遺跡	遺物包含地	縄文(早期～中期)・統縄文		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-026	真歌11遺跡	遺物包含地	縄文		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-027	飛野台地遺跡	遺物包含地	前期	1957確認、 1958・1965・1970年調査	「静内町史」・静内高校郷土研究部 (1958)・町教委(1976)	
K-05-030	駒場貝塚遺跡	貝塚	縄文(早期～中期)・ 中世・近世	1952～1954年調査	「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-031	中野台地A遺跡	遺物包含地	縄文(早期～中期)	1952年調査	「静内町史」・町教委(1954・1976・ 1985)	「静内中野式」標式遺跡
K-05-032	本町駅前遺跡	遺物包含地	縄文(中期)・統縄文・近代	1955・1956年調査	「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-033	静内神社裏台地遺跡	遺物包含地	縄文(後期)		町教委(1954・1976)	
K-05-034	静内高校校庭遺跡	遺物包含地	縄文(前期～中期)	1952年確認、調査	「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-035	宮林著裏遺跡	遺物包含地	擦文		「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-036	高静小学校裏遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-037	神森遺跡	遺物包含地	縄文(早期・後期)		「静内町史」・町教委(1954・1976)	
K-05-038	ホイナシリチャシ跡	チャシ跡	縄文・統縄文・アイヌ	1959年一部調査	「静内町史」・町教委(1954・1976)・静 内高校文化人研究部・藤本英夫(1964)	
K-05-039	不動坂登口遺跡	遺物包含地	統縄文・擦文		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-040	御殿山チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	1968年調査	「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-041	静内御殿山墳墓群	墳墓	縄文(早期・後期・晚期)・ 統縄文・擦文	1953・1960～1962・ 1964～1965年調査	「静内町史」・町教委(1954・1976・ 1984)	「静内御殿山式」標式遺跡
K-05-042	シベチャリチャシ跡	チャシ跡	アイヌ	1963年調査	町教委(1954・1985)・静内高校文化 人研究部・藤本英夫(1964)	
K-05-043	田原小学校校庭遺跡	遺物包含地	縄文(早期～中期)・擦文	1956・1957・1959年調査	「静内町史」・町教委(1954・1957・ 1958・1976)	「田原A・B式土器」設定
K-05-044	駒場15遺跡	遺物包含地	縄文(早期)		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-051	駒場遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)	1978年調査	町教委(1976)	
K-05-052	真歌12遺跡	集落跡	縄文(前期～中期)		町教委(1976)	
K-05-053	入舟遺跡	遺物包含地	統縄文(前半期・後半期)	1969年調査	町教委(1976)	
K-05-055	中野台地B遺跡	集落跡	縄文(早期～中期)	1982年調査	「静内町史」・町教委(1954・1976・ 1985)	
K-05-056	田原孵化場遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)		「静内町史」・町教委(1976)	
K-05-059	真歌公園遺跡	遺物包含地	縄文(早期～晚期)・ 統縄文・擦文	1978・1981年調査	町教委(1976・1979)	
K-05-061	駒場2遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-062	駒場3遺跡	遺物包含地	縄文		町教委(1976)	
K-05-063	駒場4遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-064	駒場5遺跡	遺物包含地	不明		町教委(1976)	
K-05-065	駒場6遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)	1978年調査	町教委(1976・1979)	
K-05-066	駒場7遺跡	集落跡	縄文(早期・中期)	1980・1981年調査	町教委(1976・1980・1982)	
K-05-067	駒場8遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		町教委(1976)	
K-05-068	駒場9遺跡	遺物包含地	縄文		町教委(1976)	
K-05-069	駒場10遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-070	駒場11遺跡	遺物包含地	縄文(中期)・統縄文		町教委(1976)	
K-05-071	駒場12遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)		町教委(1976)	
K-05-072	駒場13遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		町教委(1976)	
K-05-073	駒場14遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		町教委(1976)	
K-05-074	中野1遺跡	遺物包含地	縄文(早期～前期)		町教委(1976)	
K-05-075	中野2遺跡	遺物包含地	不明		町教委(1976)	
K-05-076	中野3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-077	中野4遺跡	遺物包含地	統縄文		町教委(1976)	
K-05-078	中野5遺跡	遺物包含地	不明		町教委(1976)	
K-05-079	神森2遺跡	遺物包含地	縄文(中期)・擦文		町教委(1976)	
K-05-080	目名1遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-081	目名2遺跡	遺物包含地	不明		町教委(1976)	
K-05-082	田原1遺跡	遺物包含地	不明		町教委(1976)	
K-05-083	田原2遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		町教委(1976)	
K-05-084	田原3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-097	真歌3遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)・統縄文		町教委(1976)	
K-05-098	真歌4遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)		町教委(1976)	
K-05-099	真歌5遺跡	遺物包含地	縄文(中期)・統縄文		町教委(1976)	
K-05-100	真歌6遺跡	遺物包含地	縄文(早期)		町教委(1976)	
K-05-101	真歌7遺跡	遺物包含地	統縄文・擦文		町教委(1976)	
K-05-102	真歌8遺跡	遺物包含地	縄文(前期)		町教委(1976)	
K-05-103	真歌9遺跡	遺物包含地	縄文(早期～中期)		町教委(1976)	
K-05-104	入舟1遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-105	真歌10遺跡	遺物包含地	不明		町教委(1976)	
K-05-106	浦和2遺跡	遺物包含地	縄文(中期)		町教委(1976)	
K-05-108	御殿山チャシ台地遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期)・ 縄繩文(前半期)	1965年調査	町教委(1976・1984)	1968御殿山文四郎チャシ発掘
K-05-109	入舟台地遺跡	遺物包含地	縄文・擦文		町教委(1976)	
K-05-112	ロクマップ2遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	1978年調査	町教委(1976・1978)	
K-05-125	温泉沢入口2遺跡	遺物包含地	縄文			
K-05-126	ウエンナイチャシ跡	チャシ跡	アイヌ			
K-05-127	真歌13遺跡	遺物包含地	縄文・統縄文			
K-05-128	田原9遺跡	遺物包含地	縄文			
K-05-129	真歌14遺跡	遺物包含地	縄文(早期～中期)		町教委(2000)	
K-05-130	真歌15遺跡	遺物包含地	縄文			
K-05-131	真歌16遺跡	遺物包含地	縄文(中期)			
K-05-134	目名3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)			
K-05-135	目名4遺跡	遺物包含地	縄文(早期)			
K-05-137	田原10遺跡	遺物包含地	縄文(早期)			
K-05-154	神森3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)		道埋文(2025本書)	

駒場貝塚遺跡（K-05-030）

1952年（昭和27年）10月26日、郷土史研究部が御殿山遺跡と中野遺跡と同日に発掘調査した。海岸から約500mの標高25mの段丘上にあるアイヌ文化期とみられる貝塚である。馬耕の際プラウで貝殻が地表にかき出されたので発見された。付近では縄文時代早期～中期の土器のほか、大正年間には多くの人骨が発見されている。貝層は火山灰層直下にあり、ウバガイ、ベニサラガイ、シカ、ヒグマ、イヌ、トド、カメ、鳥、カジキマグロ、サメの骨や鉄鍋、マキリ、ヤスが出土している。

駒場6遺跡（K-05-065）

1975年（昭和50年）～翌年1976年にかけ静内町教委が実施した埋蔵文化財緊急分布調査により、新冠町境に近い駒場台地上から15ヵ所の遺物包蔵地が確認された。公営住宅を拡張範囲にかかったのが本遺跡で、1977年10月に発掘調査を実施、30基ほどの落し穴と柱穴状の土坑合わせて61基を調査、縄文時代早期から中期の破片も出土している。1979年3月「駒場6遺跡発掘調査報告書」を刊行。

駒場7遺跡（K-05-066）

1976年（昭和51年）土砂採取地の候補地となり範囲確認調査を実施。その結果土砂採取は見送られたが、その後、土地所有者が起伏を整地し農地拡大を希望したこと、1978年（昭和53年）9月に範囲確認調査を実施、1980年（昭和55年）から2ヵ年の発掘調査を実施、住居址27軒、落し穴175基、ピット43基などを検出した。出土遺物は縄文時代早期や中期が主であるが、底部にホタテガイの圧痕がある暁式土器や住吉町式のほか魚骨回転文が施された東釧路IV式土器、早期の土器とともに出土した石錘など特徴のある遺物が検出されている。1982年3月「駒場7遺跡における考古学的調査」を刊行。

中野台地A遺跡（旧中野遺跡）（K-05-031）

遺跡は郷土史研究部誕生後間もない1952年（昭和27年）6月に確認され、中野遺跡と命名した。同年8月24日、8月28日、10月26日の3次にわたり発掘調査を実施、この時回収した土器を復元し、胎土に纖維や縫糸を含み、器面に太い斜行縄文が施された砲弾型の尖底土器を「静内中野式尖底土器」と命名した標式遺跡である。

1975年（昭和50年）から町教委が実施した埋蔵文化財緊急分布調査により、中野台地A遺跡、B遺跡のほか中野1遺跡～中野5遺跡を確認し登録された。1976年（昭和51年）の地名改正で、当該地は中野から清水丘に改められた。その後1984年（昭和59年）5月清水丘公営住宅建設計画に伴う1,800m²の発掘調査を実施する。住居址2軒、落し穴7基などが検出されたが、中でも1号址とされる遺物集中から、40個体以上の中野式尖底土器が口縁部を下に伏せられた状態で検出されたものがある。町教委は1985年3月「静内町清水丘における考古学的調査」を刊行した。

中野台地B遺跡（K-05-055）

中野台地A遺跡と同じく、清水丘公営住宅建設計画に伴い2400m²を1982年（昭和57年）6月から発掘調査を実施した。その結果、縄文時代早期の住居址11軒、土坑12基、落し穴13基などを検出した。早期の住居址の時期は暁式、貝殻条痕、押し引き文系の尖底土器、東釧路III式の3期である。

町教委は1985年3月「静内町清水丘における考古学的調査」を刊行した。町史で本遺跡は中野台地A遺跡と小沢を隔て向かいに位置する、と記載されるが、報告書記載の位置関係は同じ台地面にあるように見える。当初この遺跡はやや地点が異なるのかもしれない。

神森遺跡（K-05-037）

標高30mの台地上で、亀ヶ岡式系統の土器や耳栓が散布していた。ここでいう亀ヶ岡系統とは、河野広道が御殿山式土器設定以前の「御殿山ケルン群発掘報告書」のなかで、亀ヶ岡式系統に属すとしたため、御殿山式土器の可能性がある。1976年の埋蔵文化財緊急分布調査でも同形式が確認された。

1963年刊行の町史には神森遺跡と御殿山墳墓群の間に神森アイヌ墓地の記載があるが、墓標が朽ちたためか、その後は記載がない。

神森2遺跡（K-05-079）

中野5遺跡の東隣、標高40mの台地上にあり、埋蔵文化財緊急分布調査では広範囲で遺物が発見されている。縄文時代中期や擦文文化期の土器のほか、多種な石器類が発見されている。

御殿山チャシ跡（旧御殿山チャシコツ遺跡）（K-05-040）

静内目名地区には目名1遺跡から目名4遺跡が登録されているほか御殿山墳墓群、御殿山チャシ跡、御殿山チャシ台地遺跡がある。御殿山チャシ跡は御殿山墳墓群の南東の段丘縁に方形に溝を掘ったチャシだが、松浦武四郎の蝦夷日誌に「金丁文四郎はメナプトに住し」とあることから1669年(寛文9年)のシャクシャインの乱に登場する砂金堀文四郎がアイヌのチャシを模して設けたとの考えもある。

1963年刊行の町史には御殿山チャシ跡と御殿山墳墓群の間に目名アイヌ墓地の記載がある。

御殿山墳墓群（K-05-041）

静内御殿山式土器の標式遺跡である。遺跡は静内川河口から北東に4.5km、標高40mの台地で、明治4年に淡路藩士稻田邦植がこの地に邸宅を建てたことから通称「御殿山」と呼ばれていた。石が多く耕作に向かない土地とされ、出た石は1936年、台地裾の用水路掘削時、土手石に使用したとされる。

遺跡は、1952年(昭和27年)5月16日と5月30日、発芽直後の麦畑で表面採取を行ない、ミカン箱約2箱分の土器片を表探し発見される。表採品には土偶の頭部が1点含まれていた。北海道大学の河野広道に見てもらうと栗沢式に類似する破片を確認し、斜里町朱円のケルーン(積石)様の遺構があると予測した。収穫後の9月21日、郷土史研究部が予備調査実施、1号墳墓を検出、23日に発掘し墓であることを確認、土器4個体が得られた。10月26日には一部露頭している石を目当てに第2号墳を発見した。翌年の1953年(昭和28年)4月の調査には、河野広道の指導のもと、静内町長貝田信二、北海道大学教授高倉信一郎、講師大場利夫、静内高校教諭藤原敏郎、藤本英夫、郷土研究部で発掘調査を実施、新たに3号～7号墳を確認した。最大の2号墳から頭蓋痕とベンガラ散布の状況が確認され、異形石器4点のほか石斧未成品などが7点が出土、3、6号墳の土坑上部からは副葬された土器を検出、3号の坑底からは漆塗りの櫛2点と平玉1点が出土、6号の坑底からは石斧1点、7号からはサメの歯7点を検出した。同年6月30日付の概報「北海道静内郡静内字目名御殿山ケルーン郡発掘報告書」を町教委の委託を受けた郷土研究部がまとめた。翌年刊行した静内町町史資料第1集では「御殿山遺跡」で報告、河野は墳墓から出土した土器と斜里町朱円の墳墓群から出土した栗沢式と比較、注口土器が多いなどの特徴から亀ヶ岡式の古式の形式に属し、栗沢式とほぼ並行する年代の「静内御殿山式土器」を設定した。その後1958年(昭和33年)の調査で8号～14号墳を調査、1960年(昭和35年)の3次調査では、A・B地区2カ所のトレントを設定し、遺構に当たった場所を拡張した。AトレントからはA15号～A34号の19基、BトレントからはB1号～B12号の19基の土坑(墳墓と落し穴が混在)を検出した。1961年(昭和36年)5月の調査ではC区で15基、E区で3基、同年8月にはD区6基、昭和37年にはF区で3基の発掘調査を実施している。その後、1963年(昭和38年)12月には北海道指定史跡となり、出土した副葬品82点は昭和43年3月に北海道指定有形文化財となった。発掘調査は昭和40年までに11回行われ、80基以上の墓壙が確認されている。

昭和50年代にはいると、市街地からほど近い遺跡周囲に開発の波が押し寄せ、遺跡の広がりを確認するための試掘が行われた。1984年3月試掘結果と昭和30年代の調査状況を掲載した「御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査－静内町遺跡分布調査報告書－その2」を刊行している。

御殿山チャシ台地遺跡（K-05-108）

かつて御殿山文四郎館跡（K-05-54）として登録されていた場所で、チャシの主体部や隣接地から北筒式や大狩部式土器が出土している。昭和43年11月23日から2日間、この地域の公園化と、それに伴う火山灰採取がおこなわれるため、静内高校文化人類学研究部が4カ所のトレンチ調査を実施、縄文時代早期から続縄文時代までの遺物を検出、なかでも石刃鏃4本、石刃を40点、それに伴う早期の土器片を検出している。遺物は『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査』1984静内町教育委員会に掲載。

田原小学校遺跡（K-05-043）

田原地区には田原小学校の東に田原孵化場遺跡があるほか、田原1遺跡から田原9遺跡まで登録されている。また、田原小学校の西側に田原アイヌ墓地があった。遺跡は、静内川河口より北東に5.6km、標高23mに位置し、1951年（昭和26年）重機で校庭整備中に掻き出された遺物を同校の児童が採拾し、同校の校長を通じて静内高校郷土研究部に届けられたことから発見された。1956・57年（昭和31・32年）に静内町教育委員会が主催し北海道大学河野広道の指導の下、郷土史研究部を中心に2回の発掘調査を実施した。遺物は、火山灰層直下の黒色土層からは円筒土器や、下位より綱紋式土器が出土、下層の黒褐色土層以下からは、無文の貝殻条痕紋が施される平底の土器や、絡繩体圧痕紋などが施される平底の土器が出土した。このうち、下位の層から出土した平底の貝殻紋系の土器を田原A式、絡繩体圧痕紋などが施される土器を田原B式（東釧路Ⅲ式）と設定した。藤本は1957年（昭和32年）「静内町田原小学校庭遺跡発くつについて」、1958年（昭和33年）「静内町田原遺跡について」を静内高等学校生徒会機関誌「せいゆう」に報告している。

静内川右岸と真沼津川左岸に挟まれた神森3遺跡周辺の静内川の氾濫原に近い市街地域には数は少ないが次のような遺跡登録されている。

中野7番地遺跡（K-05-022）

土地所有者が放牧地を畑にするため重機で整地中に発見された。静内川氾濫原の標高約5mで発見された神森3遺跡から最も近くの遺跡である。1962年（昭和37年）の緊急調査で後北C・D式、北大式、擦文式、土師器、須恵器などの土器のはかラウンドスクレーパーが出土、粘土層中には直径1m前後の土坑を数基確認、土器は副葬された状態で検出したので墳墓とみられる。

営林署裏遺跡（K-05-035）

1962年（昭和37年）7月の水害後、家を新築した際土台杭の柱穴から擦文式土器の完形品と割れた別の2個体が出土した。標高は5mである。

高静小学校裏遺跡（K-05-036）

北筒式と石斧が発見され同校に保管されていたが、後の校舎増築で遺跡は失われた可能性がある。

静内高校校庭遺跡（K-05-034）

静内高等学校々庭遺跡1952年（昭和27年）7月26日、高校生が校庭の拡張作業で50cmほどの段差を切り下げている際、粘土層から土器片が出土、その後、郷土研究部を中心に調査を進め、北筒式、静内中野式の破片のほか、北筒式に伴うとみられる橄欖岩製の熊の石製品が出土している。

静内神社裏台地遺跡（K-05-033）

静内高校校庭と地続きの遺跡で、御幸町神社裏遺跡とされていた。神社裏に石垣をつくるため台地を切り崩した際、半完形品で野幌式土器（手稻式）の深鉢1個体が出土した。

本町駅前遺跡（K-05-032）

海拔7mの砂丘に明治初期から昭和初期にかけて、和人墓地と並んでアイヌ墓地があった。都市計

画で整地するため1955年から翌年にかけ(昭和30～31年)、墓地は駒場新墓地に改葬された。その際、縁故者があつて改葬された809件は、すべて日本人で、最も古い例は1882年(明治15年)の埋葬だった。明治年間に埋葬された和人の多くは稻田移住の関係者だった。アイヌ系墓地は死者に対する考え方の違いもあるためか改葬例はなく、一見墓地の形跡もない状態だった。昭和10年代の初めころにはまだ墓標も残っていたようである。墓地はケパウの会と北海道大学医学部第二解剖教室により共同調査され、161体の遺体を発掘した。発掘には郷土史研究部員も参加、主に埋葬方法と副葬品の調査を担当した。砂丘の下層からは北筒式土器、上層からは後北式土器が出土した。大正末期の駅周辺開発中にもアイヌ人骨が多く発見されているので、墓域は駅付近まで広がっていたようである。

入船遺跡 (K-05-053)

静内川左岸は川岸近くまで丘陵が迫り急峻な崖となっているが、丘陵上部は緩やかな起伏のある台地になっている。河口から入船地区、真歌地区に分布する遺跡を概観する。

静内高校生徒会誌「せいゆう」16号の調査報告によると、遺跡は河口左岸の標高3～10mに立地、1969年(昭和44年)8月町営住宅建設中に発見され、文化人類学研究部が現地に赴いたときにはすでに破壊されていた。しかし墳墓3基を確認し、うち大狩部式期の1基は記録できた。時期は縄文時代晩期末以降で、大狩部式土器、恵山式土器、後北C₂・D式(彩色)、北大式土器、ロクロ成型痕のある土器などを表採した。現在は国道、鉄路跡、町営住宅になっている。

ホイナシリチャシ跡 (入船チャシ) (K-05-038)

河口の左岸台地上には市街地を見下ろすシベチャリのチャシ群が3カ所並ぶ。最も河口に近いのがこのチャシ跡で1951年(昭和26年)北海道教育委員会により史跡に指定されている。史実は1669年(寛文年)の蝦夷の乱のとき抵抗アイヌ勢が立てこもった砦ということによる。残された記録の津軽藩の隠密である牧只有衛門の見聞きした「津軽一統志」によると、不動坂のチャシは、シャクシャインが脇乙名のときの乙名カモクタインが築いたもので、シャクシャインは入船チャシ住んでいた。1653年(承応2年)門別アイヌの乙名オニヒシとの戦いでカモクタインが殺されたあとシャクシャインは一時不動坂チャシに立てこもるが、松前に援助されたオニヒシと戦うには脆弱であるためシベチャリ河口より36町上流に新チャシを築いたと記される。

標高60mにある太平洋の水平線を見渡せる丘先式チャシで、1963年(昭和38年)7月静内町教育委員会の計画により、発掘調査を実施、藤本英夫以下静内高校、苫小牧工業高校、静内中学、浦川第一中学の郷土研究部のほか、東大文学部菊池徹夫、明大文学部大塚和義、小林孝子、北大文学部河野本道、東川中学愛下淳、富川中学扇谷昌康、静内高校郷土研究部OB会ほか多くの参加者があった。入船チャシでは2本のトレンチ調査を実施、漆器、木製品、鉄斧、キセル、鉄鍋、鹿角、マレク、そのほか刻文のある擦文土器のほか、火山灰より下層に古い溝が検出されている。

シベチャリチャシ跡 (不動坂チャシ) (K-05-042)

シベチャリのチャシ群の中で主砦といわれ、通称シャクシャインのチャシとして親しまれている。標高80mの舌状台地の先端部にある丘先式チャシで、静内川の沖積平野を見渡せる。1951年(昭和26年)9月6日北海道教育委員会により史跡に指定されている。町史には、もとは三重の溝で耕作のため外・中の溝は埋められ南西の崖面に溝跡が残るとある。1669年(寛文9年)の蝦夷の乱(シャクシャインの乱)の舞台とされる。1963年(昭和38年)7月静内町教育委員会の計画により発掘調査を実施、舌状部から溝に達する2×36mのトレンチを設定、その結果、溝の構造が2重であることや、外側に6本の柱穴がある方形の竪穴状遺構(2×2m)を検出、床面から鉄鍋、鉄斧、漆器の椀や皿、木製品、布、マレク、赤塗りの方形の盆、5枚の板を竹釘でつなないだ鍋蓋とみられる円形の板が検出された。

シンプツナイチャシ跡 (K-05-023)

静内川河口近くの三つのチャシのうち最も上流に位置する。河口から1.3kmの標高70mにある丘先式チャシで、台地上からは川の上流の日高山脈を遠望することができる。

昭和32年静内高校郷土研究部によって発見され、台地上は後北式土器の包含地でもある。

昭和52年の埋蔵文化財緊急分布調査では、クマザサに深く覆われ確認できていない。

シンプツナイ遺跡 (K-05-021)

静内川左岸にあり、土地所有者は耕作当初の大正から昭和初期頃は完形土器が多数出土したと証言している。包含層では続縄文後半期から擦文文化期の遺物が出土し、住居址も確認されている。

不動坂登口遺跡 (K-05-039)

静内川河口より約500mに真歌公園の登口付近が台地になっている。後背地は急な斜面にとなり不動坂チャシに続く。擦文式土器や後北式土器が表採されている。

真歌公園遺跡 (K-05-059)

アイヌ語でマウタウシ(ハマナスの実のとれるところ)とよばれた標高80mの野球場を含む台地上のほぼ全域で遺物が出土している。1974年(昭和49年)テニスコート造成予定地で範囲確認調査を実施、広範囲な遺物包蔵地が確認されている。1977年(昭和52年)真歌山にシャクシャイン記念館を建設することとなり、1978年(昭和53年)5月から418m²の発掘調査を実施。住居址1軒、土坑4基、落し穴2基を検出、遺物は縄文時代早期前葉から中期、後期の土器・石器が出土、中でも縄文時代後期前葉の余市式系土器は数少ない出土例である。1979年「真歌公園遺跡」刊行。

マウタサップ遺跡 (K-05-018)

静内川河口より約1km東のマウタサップの沢の包蔵地で、縄文時代早期、前期、中期、擦文土器などが出土。マウタサップ式は、河野が本遺跡資料と田原A式のうち無文の土器で仮称したもの。

真歌14遺跡 (K-05-129)

広域農道整備事業に伴う発掘調査を1999年(平成11年)5月下旬から実施。調査面積470m²から土坑4基、焼土15カ所、集石5カ所を検出、縄文時代早期前半期、後葉期の破片のほか、縄文時代中期の円筒系の土器が出土している。2000年(平成12年)3月「真歌14遺跡発掘調査報告書」刊行。

真歌遺跡は1～15遺跡まで登録され、静内川左岸台地上に広く分布する。

飛野台地遺跡 (K-05-027)

遺跡は静内町真歌の標高130m、飛野正司氏の耕作地で飛野遺跡の隣にある。1957年(昭和32年)静内高校郷土研究部により発見され、翌年5月に発掘調査を実施、静内中野式土器の単純遺跡で土器に伴う石器が確認できた遺跡である。1965年(昭和40年)土地所有者より耕作時に遺跡を壊したとの連絡があり、深土耕による破壊から遺跡を守るため同年5月緊急調査を実施、出土した中野式に羽状縄文が施される破片が検出された。同年「トビノ遺跡緊急発掘調査報告」を静内町教委が刊行している。

ロクマップ遺跡 (K-05-16)

ロクマップは静内川河口から約2.5km東の沢で、沢の右岸の標高30m付近から縄文時代中期の北筒式、後期末葉の御殿山式、後北式土器が出土している。

ロクマップ2遺跡 (K-05-112)

遺跡はロクマップ川右岸の標高40mにあり、粗大ゴミ処理施設建設に伴う650m²の発掘調査を1977年(昭和52年)4月29日から5月5日まで実施し、土坑2基、集石1カ所を検出した。出土遺物は縄文時代中期の円筒系土器が出土している。1978年(昭和53年)3月「ロクマップ2遺跡」刊行、なお、遺物の整理実測には静内高校文化人類学研究部が協力している。

III 遺構

検出された遺構は、土坑1基、焼土7カ所のほか、土器集中3カ所、集石1カ所、フレイク・チップ集中2カ所、焼骨集中が1カ所である。

土坑が検出されたのがB地区の低地で、そのほかの遺構はすべてA地区のIV層面の標高8m付近で検出されており、縄文時代後期前葉のものとみられる。土坑はB地区低地のIII層検出なのでより新しい時期である。

土坑

P-1

土坑の規模は上場が直径約134cm下端の直径約48cm深さ80cmの円形土坑で、M7区のII層(Us-b)除去中に火山灰の落ち込みで確認した。土坑の南側をIII-1層まで下げ検出し、断面調査を行った。覆土上部には有珠b火山灰層より上層の攪乱を受けていない黒色土はここだけである。火山灰層下のIII-1層も流れ込む様子もなく緩やかに落ち込み、III-2層土の崩落が土坑上部に流れ込む様子のあることから、掘り込み面はIII-1層下位かIII-2層上位とみられる。付近のL6区III-3層から燕尾形の石鏸が1点検出されているが、これは土坑の時期より古いものとみている。

土坑の性格は、縄文時代晩期や続縄文時代によくみられる埋め戻しのない土坑である。ただし、道央圏などで頻繁にみられるこの様な土坑は数多く検出され、単独で検出されるのはめずらしい。

(土肥)

焼土

F-1

I 11区のIV層で検出した。平面は略円形で、直径は約40cmを測る。焼土の上面から周囲には焼骨片が散在する。北東側にF-7が隣接する。周囲からIV群a類の土器片や石槍等、遺物が多く出土している。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

F-2

I 10区のIV層で検出した。平面は略円形で、直径は約40cmを測る。南側にはF-3・5・6が近接し、周囲からIV群a類の土器片集中(PB-1)や石槍等が出土している。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

F-3・6

I・J 9区のIV層で検出した。F-3とF-6の平面はひょうたん状につながっており、くびれた部分を境に分かれる。F-3の北東側は攪乱によって失われている。断面はどちらも中央付近が深く、厚さは15cm程である。南東側にF-5が隣接し、北側にはF-2が近接する。周囲からIV群a類の土器片集中(PB-1)等が出土している。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

F-4

H 9区のIV層で検出した。平面は略円形で直径約35cmを測る。周囲には焼骨片が散在する。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

F-5

J 9区のIV層で検出した。F-3・6の南東側に隣接する。平面は不整橢円形で、長径は約40cmを測る。南側の上位に焼土粒がやや集中する。断面はF-3・6と同様に中央部が深く、厚さは18cmである。周囲からはIV群a類の土器片集中(PB-1)等が出土している。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

F-7

F-1の北東側に隣接する。直径約25cmの小規模な焼土で、厚さは2cmを測る。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

土器片集中

PB-1

I 10区のIV層で検出した。IV群a類の土器片集中である。集中の西側は試掘坑により、東側の一部は攪乱により失われている。範囲の中央付近では、比較的大形の土器片が内面を上に向けた状態で重なる。周囲にはF-2・3・5・6が位置する。

PB-2

J 10・11区のIV層で検出した。IV群a類の土器片集中である。集中の南東側から南側は攪乱により失われている。周囲から礫石器等が出土し、FB-1・2と近接する。

PB-3

I 12区のIV層で検出した。IV群a類の土器片集中である。範囲の一部がSB-1と重複する。

剝片集中

FB-1

J 11区のIV層で検出した。1～10mm程度の剝片・碎片の集中である。範囲内から石槍の破片が出土している。周囲にはIV群a類の土器片集中(PB-2)、剝片集中(FB-2)、骨片集中(BB-1)が位置する。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

FB-2

J 11区のIV層で検出した。1～10mm程度の剝片・碎片の集中である。FB-1からは南南東に約3m離れている。周囲にはIV群a類の土器片集中(PB-2)、骨片集中(BB-1)が位置する。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

礫集中

SB-1

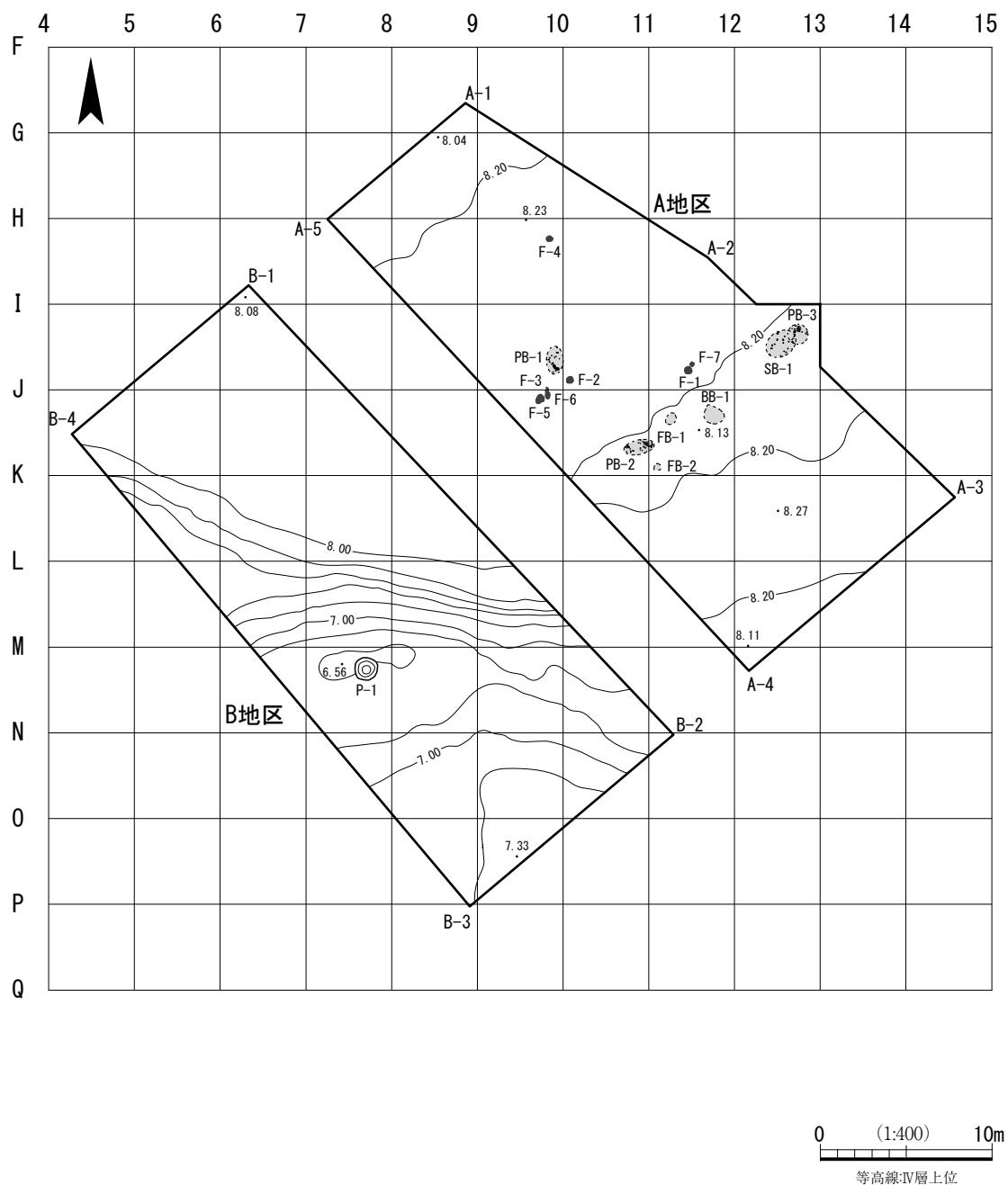
I 12区のIV層で検出した。I 12区付近は緩い凹地になっており、A地区ではこの付近に限ってII層が残存していた。礫集中は、凹地のなかでも北西側から南東側に緩く傾斜する部分に位置する。礫は長径7、8cmを測る長楕円礫の集中で、23点を数える。番号2・3、4・5、9・10、19・20のように、2つ近接して出土するものが目に付く。北東側がPB-3と重複しており、23は土器片の上から出土している。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

骨片集中

BB-1

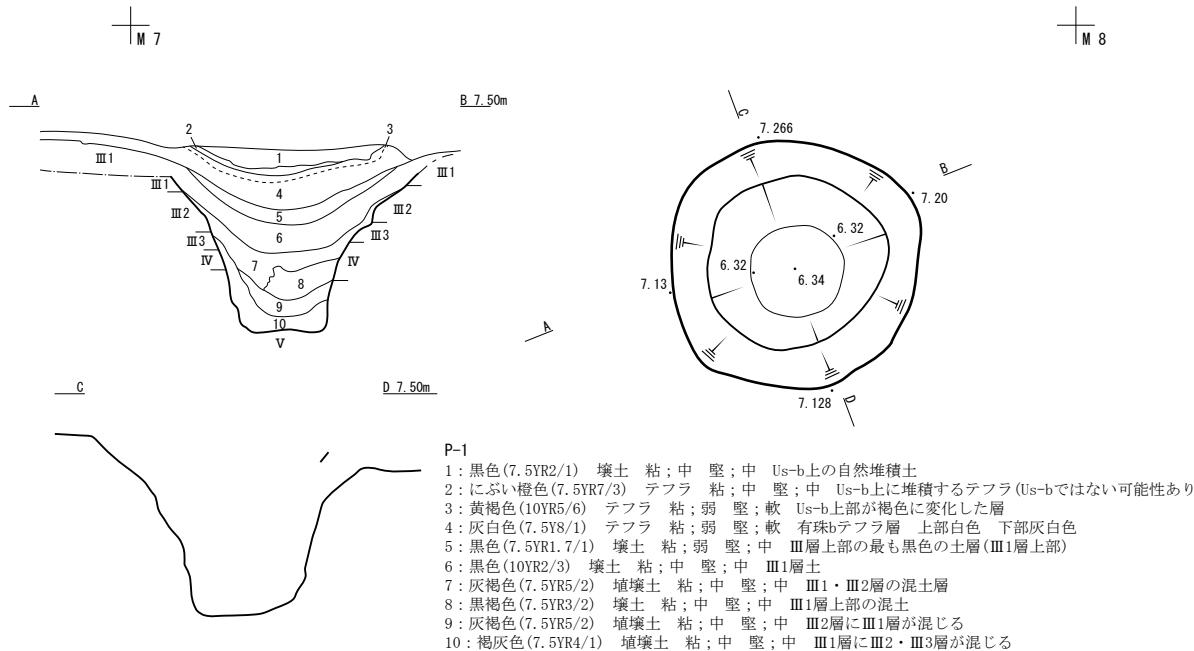
J 11区のIV層で検出した。焼骨片がややまとまって出土した範囲である。F-1やFB-1に近接する。周囲から磨製石斧の基部片等が出土している。時期は縄文時代後期前葉と推定される。

(山中)

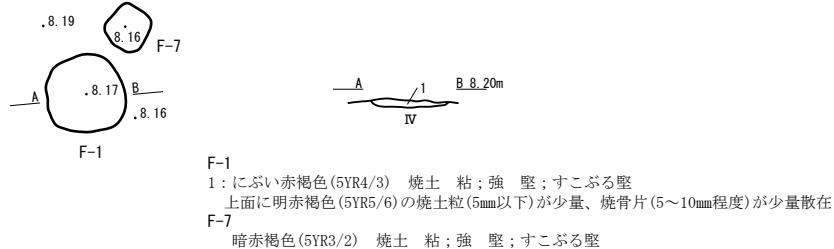


図III-1 遺構位置図

P-1



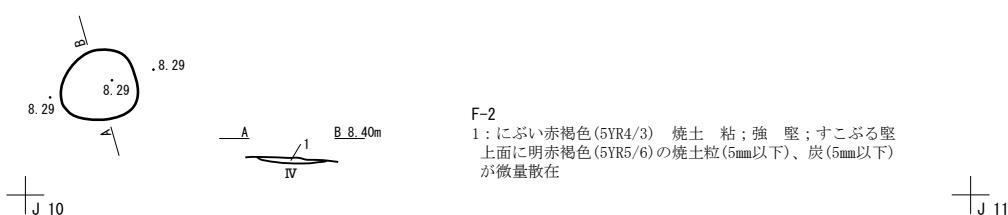
F-1・7



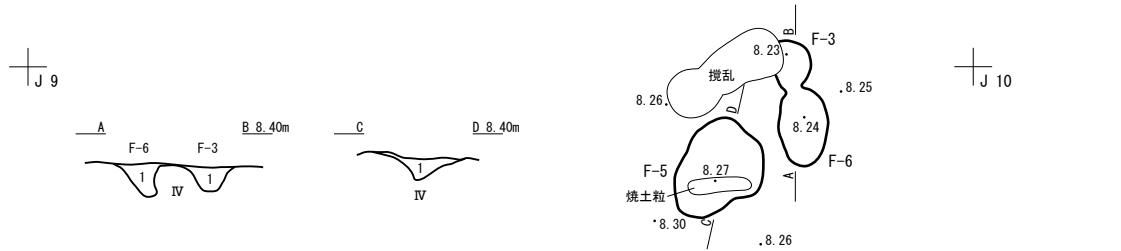
J 11

J 12

F-2



F-3・5・6



0 1:40 1m

図III-2 P-1・F-1・3・5・6・7

F-4

+ H 9 + H 10

A B 8.30m
IV

.8.10 .8.14 .8.16
— 8 —

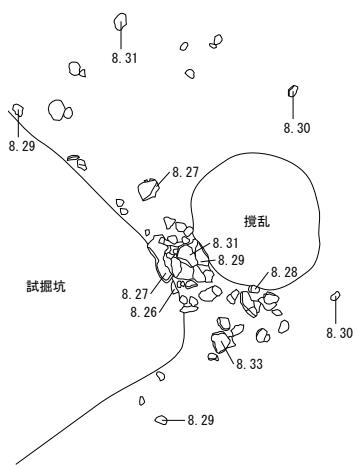
F-4
1: 暗赤褐色(5YR3/2) 焼土 粘; 強 堅; すこぶる堅
上面に明赤褐色(5YR5/8)の焼土粒(5mm以下)が微量、周囲に焼骨片(5mm程度)が微量散在

— 8.31 + J 12

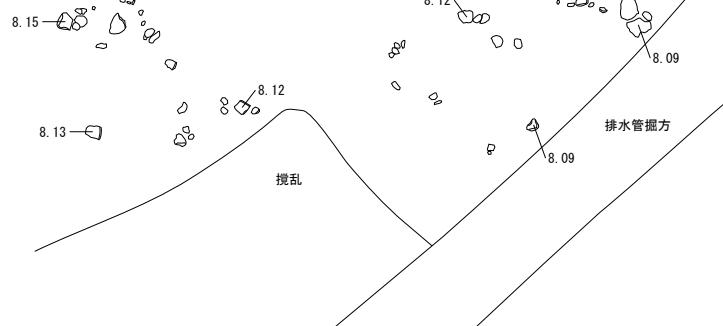
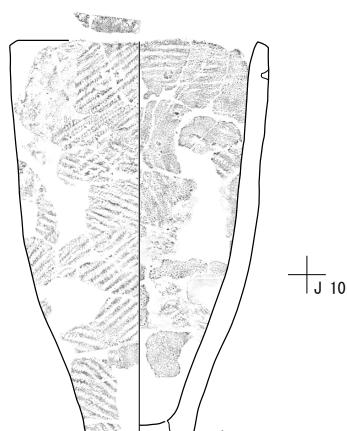
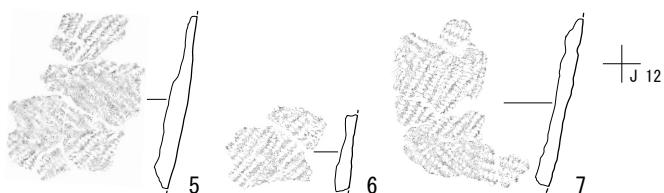
PB-1

— 8.33

PB-2



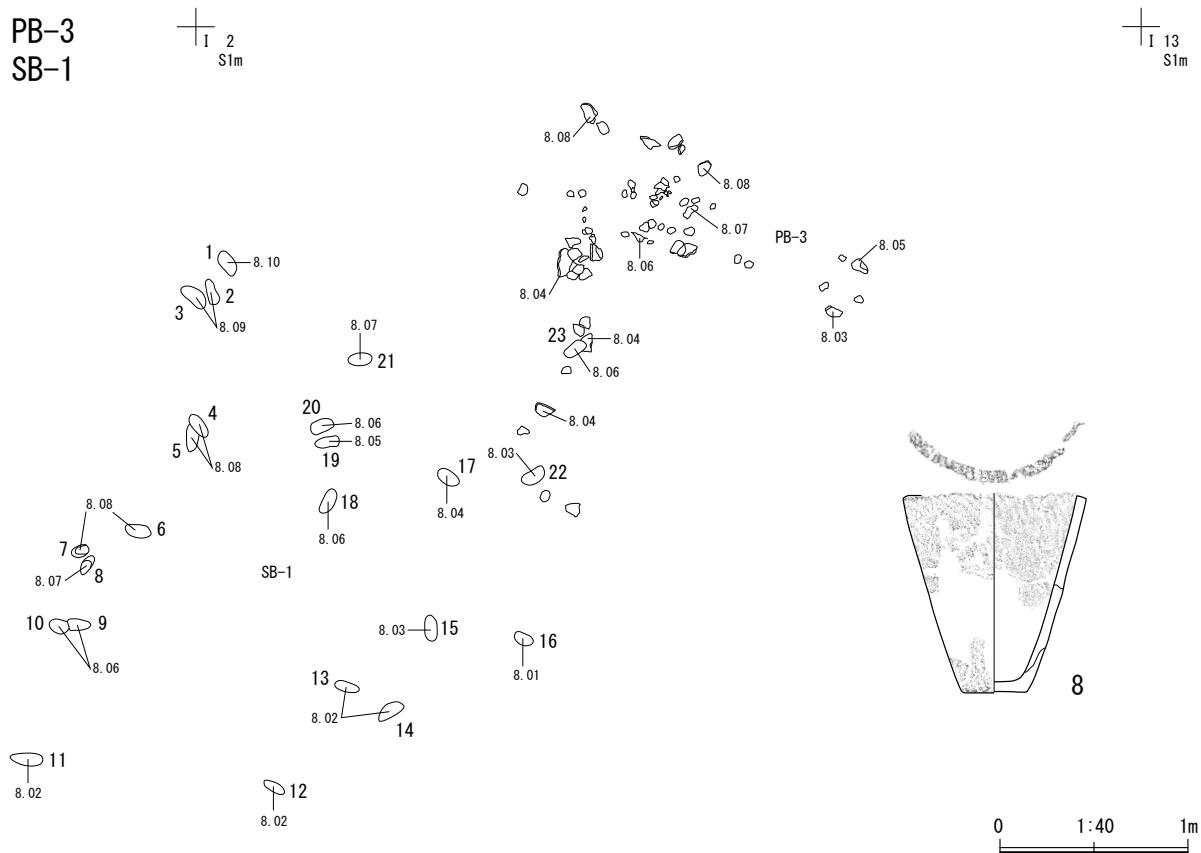
2 3 4



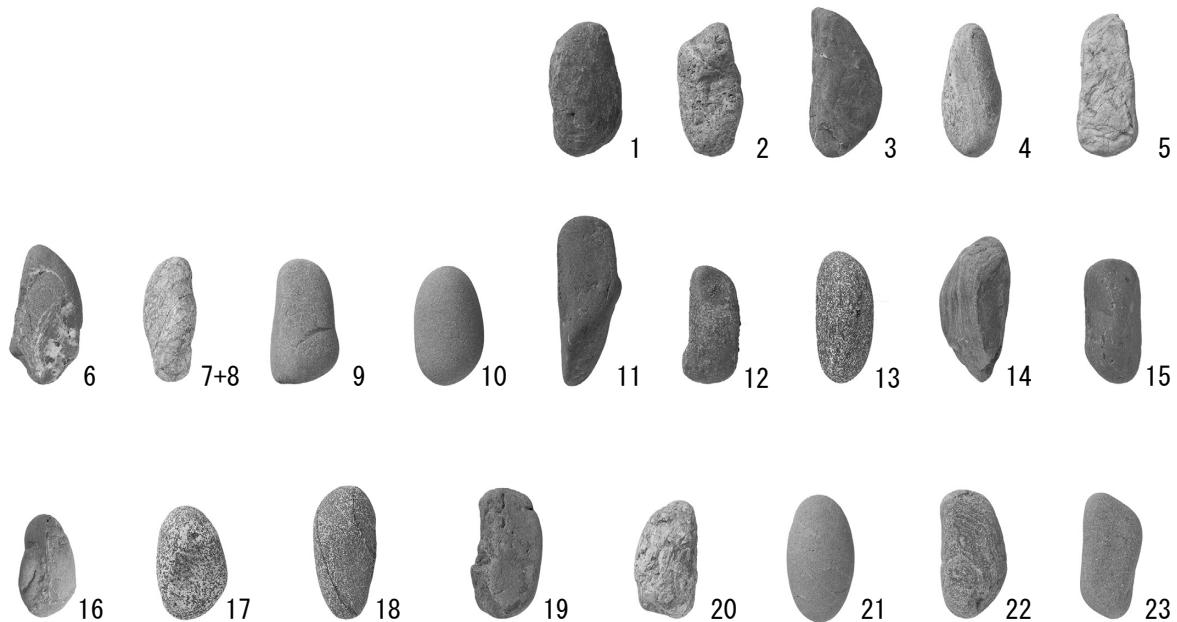
0 + K 11 1:40 1m

図 III-3 F-4・PB-1・2

新ひだか町 神森3遺跡



図III-4 PB-3・SB-1



図版III-1 SB-1 出土遺物

表III-1 SB-1 碓計測値

番号	長軸 (mm)	単軸1	単軸2	重量 (g)	岩石名	番号	長軸 (mm)	単軸1	単軸2	重量 (g)	岩石名	番号	長軸 (mm)	単軸1	単軸2	重量 (g)	岩石名
1	71.4	37.6	29.4	110.7	珪岩	10	73.4	47.6	38.4	96.9	砂岩	18	81.1	44.1	37.0	103.2	片麻岩
2	70.8	33.9	23.9	83.2	珪岩	11	100.9	44.1	34.9	112.9	泥岩	19	80.7	44.5	37.5	83.5	泥岩
3	80.8	36.1	21.6	89.6	珪岩	12	73.3	37.8	33.5	68.4	泥岩	20	78.5	43.1	36.0	78.9	珪岩
4	71.3	32.1	20.2	70.7	片麻岩	13	80.0	41.3	36.3	87.9	片麻岩	21	77.9	46.5	36.5	88.9	砂岩
5	75.8	28.5	22.8	72.2	片岩	14	87.9	48.7	36.7	87.1	泥岩	22	79.3	45.1	26.3	88.0	珪岩
6	74.9	37.1	24.8	89.9	珪岩	15	77.5	39.9	34.5	71.9	泥岩	23	71.0	37.9	30.1	90.5	砂岩
7+8	65.4	27.6	26.6	66.0	片麻岩	16	64.9	41.1	38.3	70.7	泥岩						
9	67.3	34.9	24.4	97.2	砂岩	17	70.8	47.3	35.9	85.3	片麻岩						

IV 遺 物

1 遺物出土状況

遺構や包含層から出土した遺物総点数は2,657点で、内訳は土器2,041点、剥片石器類474点、礫石器類141点、その他1点である。土器には近代陶器1片が混じるが、それ以外はすべて縄文時代後前葉のタブコブ式相当とみられる。また、土器の点数が突出して多いが、これは土器の表面が剥離しやすく、1片の破片の表面から数十点の剥片が生る例が含まれている結果である。さらに調査区がA・B地区に分かれるが、出土遺物の9割5分以上がA地区のIV層から検出されている。これはA地区が標高8m弱の段丘面上なのに対しB地区の半分は低地で残り半分の台地上はほぼ住宅基礎で失われていたためである。出土した土器は比較的まとまりのあるものがあり、報告点数は少ないが、報告しなかった同一個体残片が多くある。

2 土器(図IV-1-1～12 図版5)

1は土器集中1で検出された土器を想定で復元したもの。試掘調査時にI 9区から検出し、本調査で続きを検出した。この土器が検出されたことにより本遺跡が発掘調査されることとなった。出土点数は試掘時に34点、一括土器として取り上げた破片543点、同じグリッドから出土した破片点数を合わせると950点を超え、遺跡全体の出土土器の半分がこの土器付近から出土したことになる。復元には49片を使用、未接合の大きな破片は100点を超え、個体の4割ほどが残っていたものとみられる。

口縁部は2片と少ないが、平らな口唇は外側に下がり気味に調整され縄文が付される。口唇から2cmほど下の口縁部に縄端部の刺突文が1cmの間隔をあけ2カ所付される。地文は多縄のLRで、外面は施文方向をかえ羽状に、底面と内面は器の中位ほどまで不規則に施文する。胎土には多量の砂粒や小礫を含む。底部はやや上げ底で、土器の大きさは推定で、口径20.5cm、器高33.3cm、底径7.6cm、器厚1.8cmである。

2～7はJ 10・11区検出の土器集中2から検出された破片で同一個体である。土器集中2では204点の土器片を検出し、接合してある程度の大きさになった破片や口縁部片の20点を掲載、残片の多くは細かな細片である。2～4は口縁部片で4の破片が唯一内面の残る破片である。平らな口唇は外側にやや下がり気味に調整され、縄文が施されていた可能性もある。5～7胴部片ですべて内面が剥離している。土器集中2から出土した破片に内側片はほとんど含まれないため、そもそも表面剥離片の集中出土だったとみられる。胎土には砂粒を含むほか植物纖維を少量含む痕跡がある。地文は多縄RLの原体の施文方向をかえ羽状に施す。

8は調査区を拡張したI 12区の集石の端と重なり検出された土器集中3を復元したもの。出土点数は187点あり、復元には18点を使用、残片もすべて同一個体片とみられ、全体の5割ほどは依存しているとみられる。口縁部も破片を合わせると全体の5割ほどあり、底部も径がわかる程度接合したため復元。口径14.6cm、底径5.2cm、器高15.7cm、器厚0.75cmである。口唇は平らでやや外側に下がり気味に調整し地文が施される。器面には内外面ともRL多縄の斜行縄文が施され、胎土には多量の砂粒や小礫を含む。

9はI 11区IV層出土の口縁部片で、同一個体とみられる破片は検出されていない。口唇はまるく摩耗し、縄文が施されているかは不明、地文は多縄のLR多縄で、外側は羽状、内側は縄が水平になるよう施文する。また口縁部から3cmほど下に原体の圧痕文が付される。胎土に多量の砂粒を含む脆弱な破片である。

10は調査区を拡張したI 12区から検出した突起頂部付近の口縁部片で摩耗が著しい。地文はLR多縄とみられ、外側のみに横方向に施文する。内面に施文の痕跡はない。胎土に多量の小砂利や砂粒を含む破片で、器面は摩耗し、胎土に混じる小礫が浮き出しザラザラになっている。口唇は平らに調整される。口縁部の突起は口縁部より約20mm高まる。

11はA地区南端のL 12区の遺物がややまとまって出土した範囲から出土した。タガ状の貼り付けが付された破片4点が横に接合したもの。出土土器でタガ状の貼付帯が付されるのはこの個体のみである。器面に焼け色がある大型深鉢の胴下部片で、付近の胴部最大径で22.5cm、器厚16.6mmある。

地文は太い多縄LRで、施文順は地文を施した後にタガ状の添付帯を付し、さらに地文を施したものである。内面は縦横になでた痕跡があり、煤の付着がみられる。胎土には砂粒や小砂利を含む。

12はB地区の道路際の壁面清掃の際、舗装道路の砂利層下に残るIV層上面付近で検出した。L 9区付近では同一個体の小片が79点検出された。A地区と町道を挟み約6m離れているが、A地区から続く遺物とみられる。大型深鉢胴部片で、地文は太い多縄LRで、外側は施文方向をかえ羽状様に内面はなで調整され、図の右上端付近に外側と同じ縄文が施される。胎土には砂粒や小砂利を含み、この破片中央付近で胴径19cm、器厚18.7mmである。

3 石器(図IV-2-1~21・図IV-3-22~28 図版6)

図IV-2-1~8は石鎌、9は石錐、10~12が石槍、13~16はスクレイパー類で16以外はすべて黒曜石製である。石器の時期は8の石鎌を除きすべて縄文時代後期前葉に属すとみられる。

1は拡張範囲のI 12区出土の完形品で両面に素材面が残る。

2はA地区北側のG 8区IV層より検出した。先端部を欠損する。

3は土器集中1の周囲から検出されたひし形タイプのもの。

4はA地区南側のK 12区IV層より検出した。先端部と基部を欠く。

5はA地区中央のI 10区IV層より検出した。基部を欠損する。長いタイプの石鎌だが、周りから別な時期の遺物がまったくないことから同時期の石鎌とみている。

6はA地区中央のI 10区IV層より検出した。基部と左側の逆刺部を欠損する。石鎌とみているが、先端部が90度近くあり、石鎌先端としては鈍角なので両頭石器である可能性もある。

7は土器集中1の周囲から検出された基部の太いタイプのもので、左側の逆刺部を欠損する。

8はB地区出土の唯一の石器で、低地境のL 6区III-3層中から検出している。出土層位はほかの石鎌より上層であること、無茎で凹基の石鎌であることなど、縄文時代晚期後葉以降の石鎌である可能性がある。先端部がわずかに欠損し、腹面には素材面が残る。

9はA地区中央やや北寄りのH9区IV層より検出した石錐である。小さな剥片端部に90度に近い刃部を作出したもの。下端に細かい刃先があったようにみえるが、使用時に剥離したとみられる。

10~12は石槍とみている。

10はI 11区の土器片の間から検出された石槍で、基部の大きな剥離を先端部の調整が切ることから柄に装着されていた可能性がある。

11はI 10区出土のひし形の石槍で石器全体がやや摩耗している。また、左側の逆刺部を欠損する。

12はA地区南端のL 12区から検出、付近では掲載土器11が出土している。腹面には素材面が広く残り、基部端部を欠く。

13はA地区北寄りのH 9区IV層より検出した片面調整のスクレイパーである。小さな剥片のほぼ全周に丁寧な剥離調整が施される。

14はH 11区出土のUフレイク。小さな剥片の左右両サイドに使用痕が認められる。

15は土器集中1の南側にあるF-2、3、5、6の焼土群わきから3つに割れた状態で検出されたスクレイパー片で下端を欠く。縦長剥片の両サイドに刃部が作出される。

16はJ 12区出土のスクレイパーで珪岩製剥片石器である。縦長剥片の両サイドに刃部が作出される。

17、18は石斧片、17は細い石斧の基部片で、全面が丁寧に磨かれる。

18は石斧未成品の端部片である。原石の角を敲打によってまるく調整中に折れたもの。A地区からは石斧片がほかに2片と緑色片岩フレイクが1点出土している。

19は緑色片岩製のたたき石。たたき石は敲打痕のある礫のうち手にもって使用したとみられるもので、割られて扁平になった礫片の側縁全体を使用している。

20～27は凹み石である。砂岩や片麻岩の橢円形の扁平礫を主に使用している。分布はA地区の焼土検出域周辺になっている。扁平面の長軸端付近を両面とも使用した例が多い。

20は3つに割れ近場に散った破片を接合したもの。

21は2片が並んで出土している。

22は使用中に裏面が剥離しそうが、そのまま裏面も使用している。22、23はG 9区出土、24は砂岩製で頂部が破損する。

25は側面に敲打による剥離がみられる。

26は砂岩製で、ほかのものと比較すると使用頻度が低い。

27は片面のみ使用している。28は台石、重量が約2.6kgで、台として使ったとみられる。

4 近現代遺物(図IV-4-1～7 図版7)

1は口縁部に連続した山セの屋号が一つ一つ手彫りで刻まれた、口径27.5cmくらいの甕の口縁部片とみられる。口縁部は2.5cmの厚みがあり、器壁は表面に柔らかな粘土を塗り毛羽立たせた調整が施される。

2は昭和3年発行の鳳凰50銭銀貨、この銀貨は1922年～1938年(大正11年～昭和13年)まで発行された。3～5は蹄鉄。

3と4は鉄頭と鉄尾に突起が付され、最大幅が益14cmあり、道産子の農耕用の蹄鉄とみられる。

5の最大幅は11.7cmで軽種馬用の蹄鉄とみられる。

6は径100mm、太さ6mmほどの環状の鉄製品で、馬具のハミ環とみられる。

7はB地区を縦貫する用水路跡から出土した昭和の柄付き木製品で、先端を薄く加工した一枚板に長さ17.5cmの柄を付け、先端ほど薄く長方形に加工したもので、長方形部分の四隅に釘穴が空いていたとみられる。用途は不明であるが、長方形部分に何かを装着していたかもしれない。

表IV-1 掲載土器一覧

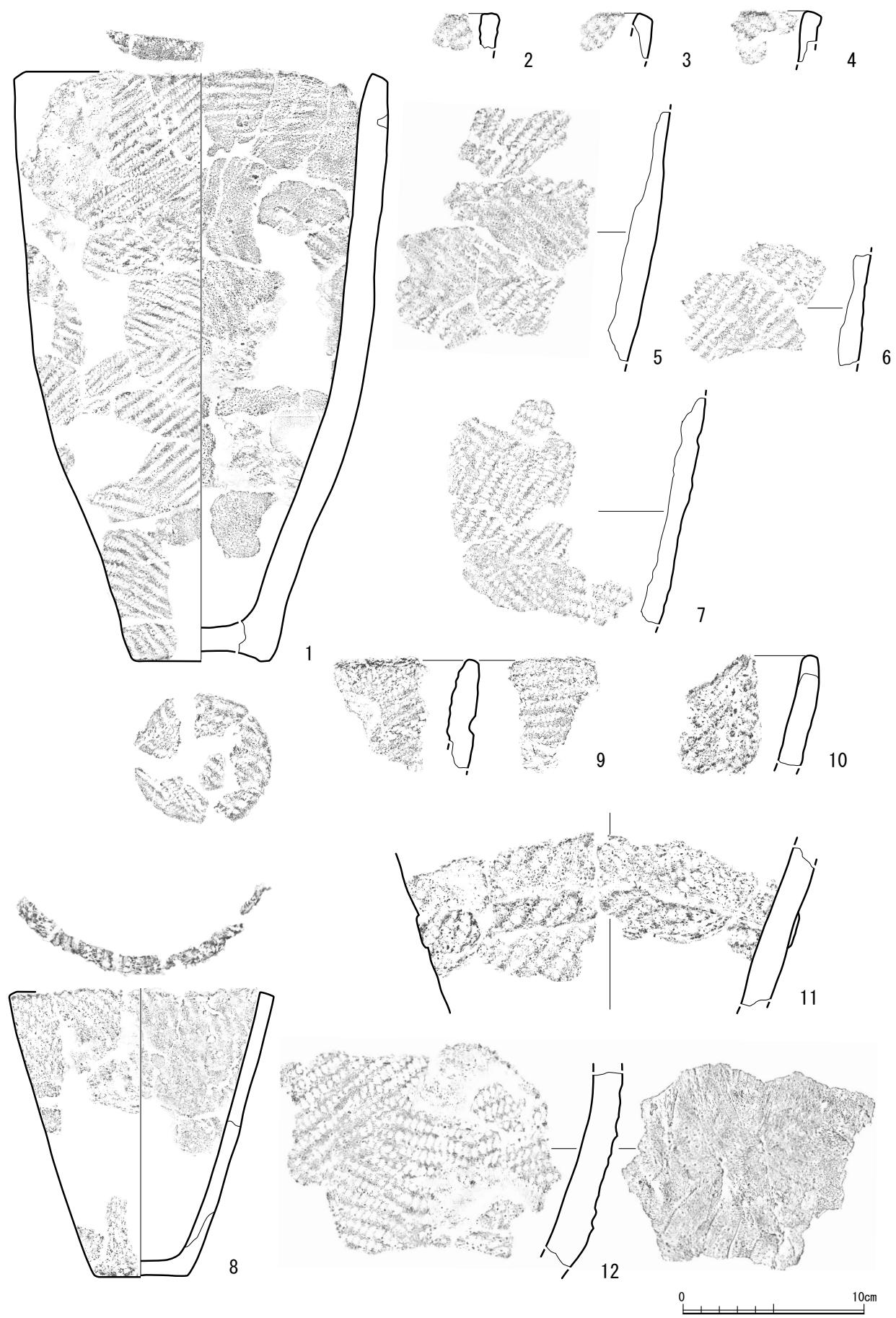
挿図番号	掲載番号	図版番号	遺構・グリッド	層位	点数	分類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(mm)	地文	胎土混入物	備考
図IV-1	1	5	PB-1	IV	38	IVa	深鉢	口縁～底	20.5	33.3	7.6	18.0	LR多繩	砂粒・小砂利	タブコブ式
図IV-1	2	5	PB-2	IV	1	IVa	深鉢	口縁部	—	—	—	10.7	RL多繩	砂粒・少量の纖維	タブコブ式
図IV-1	3	5	PB-2	IV	1	IVa	深鉢	口縁部	—	—	—	11.4	RL多繩	砂粒・少量の纖維	タブコブ式
図IV-1	4	5	PB-2	IV	3	IVa	深鉢	口縁部	—	—	—	10.4	RL多繩	砂粒・少量の纖維	タブコブ式
図IV-1	5	5	PB-2	IV	7	IVa	深鉢	胴部	—	—	—	—	RL多繩	砂粒・少量の纖維	タブコブ式
図IV-1	6	5	PB-2	IV	3	IVa	深鉢	胴部	—	—	—	—	RL多繩	砂粒・少量の纖維	タブコブ式
図IV-1	7	5	PB-2	IV	5	IVa	深鉢	胴部	—	—	—	—	RL多繩	砂粒・少量の纖維	タブコブ式
図IV-1	8	5	PB-2	IV	18	IVa	深鉢	口縁～底	14.6	15.7	5.2	7.5	RL多繩	砂粒・小砂利	タブコブ式
図IV-1	9	5	I11	IV	1	IVa	深鉢	口縁部	—	—	—	14.1	LR多繩	砂粒・小砂利	タブコブ式
図IV-1	10	5	I12	IV	1	IVa	深鉢	口縁部	—	—	—	13.4	LR多繩	砂粒・小砂利	タブコブ式
図IV-1	11	5	L12	IV	4	IVa	深鉢	胴下部	—	—	—	16.6	LR多繩	砂粒・小砂利	タブコブ式
図IV-1	12	5	L9	IV	5	IVa	深鉢	胴部	—	—	—	18.7	LR多繩	砂粒・小砂利	タブコブ式

表IV-2 掲載石器一覧

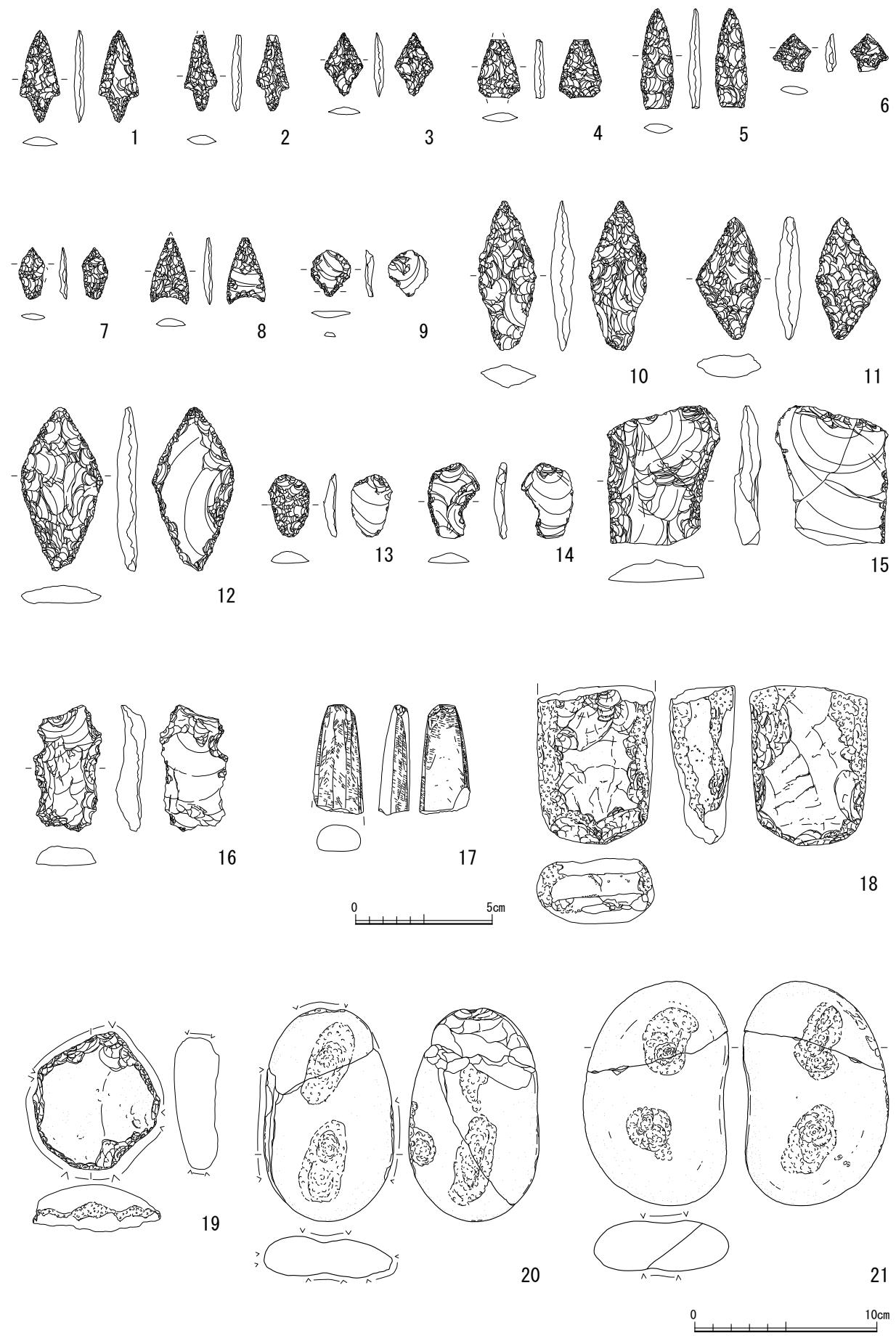
挿図番号	掲載番号	図版番号	遺構・グリッド	層位	点取り番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
図IV-2	1	6	I12	IV	19	石鎌	黒曜石	3.33	1.46	0.36	1.2	
図IV-2	2	6	G8	IV	1	石鎌	黒曜石	(2.78)	1.16	0.38	(0.8)	
図IV-2	3	6	I9	IV	6	石鎌	黒曜石	3.05	1.84	0.46	1.5	
図IV-2	4	6	K12	IV	1	石鎌	黒曜石	(2.15)	(1.53)	0.36	(1.1)	
図IV-2	5	6	I10	IV	1	石鎌	黒曜石	(3.64)	1.2	0.43	(1.6)	
図IV-2	6	6	H9	IV	1	石鎌	黒曜石	(1.34)	(1.34)	0.35	(0.5)	
図IV-2	7	6	I9	IV	1	石鎌	黒曜石	1.88	(0.93)	0.3	(0.4)	
図IV-2	8	6	L6	III-3	1	石鎌	黒曜石	(2.4)	1.4	0.3	(0.7)	
図IV-2	9	6	H9	IV	3	石錐	黒曜石	1.69	1.45	0.3	0.4	
図IV-2	10	6	I11	IV	13	石槍	黒曜石	5.43	2.1	0.85	6.7	
図IV-2	11	6	I10	IV	12	石槍	黒曜石	(4.43)	2.4	0.95	(7.7)	
図IV-2	12	6	L12	IV	1	石槍	黒曜石	5.94	3.0	0.73	9.3	
図IV-2	13	6	H9	IV	2	スクレイバー	黒曜石	2.25	1.5	0.45	1.1	
図IV-2	14	6	H11	V	2	Uフレイク	黒曜石	2.74	1.84	0.45	1.7	
図IV-2	15	6	J10	IV	2	スクレイバー	黒曜石	(5.1)	4.1	(1.0)	(17.1)	
図IV-2	16	6	J12	IV	1	スクレイバー	珪岩	4.6	2.45	1.1	10.2	
図IV-2	17	6	H10	IV	5	石斧	緑色片岩	(6.0)	(2.75)	(1.7)	(43.9)	
図IV-2	18	6	J11	IV	10	石斧	緑色片岩	8.64	6.44	3.6	330.9	
図IV-2	19	6	I11	IV	29	たたき石	緑色片岩	7.53	7.0	2.55	185.2	
図IV-2	20	6	I12	V	7-8-12	凹み石	片麻岩	11.6	7.15	2.24	(312.4)	
図IV-2	21	6	J10	IV	8-9	凹み石	片麻岩	12.2	7.9	2.8	503.7	
図IV-3	22	6	G9	IV	7	凹み石	片麻岩	12.82	6.55	1.72	206.3	
図IV-3	23	6	G9	IV	4	凹み石	片麻岩	16.1	6.4	2.4	372.1	
図IV-3	24	6	I10	IV	10	凹み石	砂岩	(11.94)	9.06	3.5	(486.4)	
図IV-3	25	6	G10	IV	1	凹み石	片麻岩	13.5	9.0	3.75	629.5	
図IV-3	26	6	I9	IV	10	凹み石	砂岩	12.8	7.45	4.22	599.1	
図IV-3	27	6	G9	IV	2	凹み石	片麻岩	11.7	5.8	2.65	319.6	
図IV-3	28	6	I10	IV	9	台石	砂岩	19.7	13.8	7.75	2620	

表IV-3 近現代遺物一覧

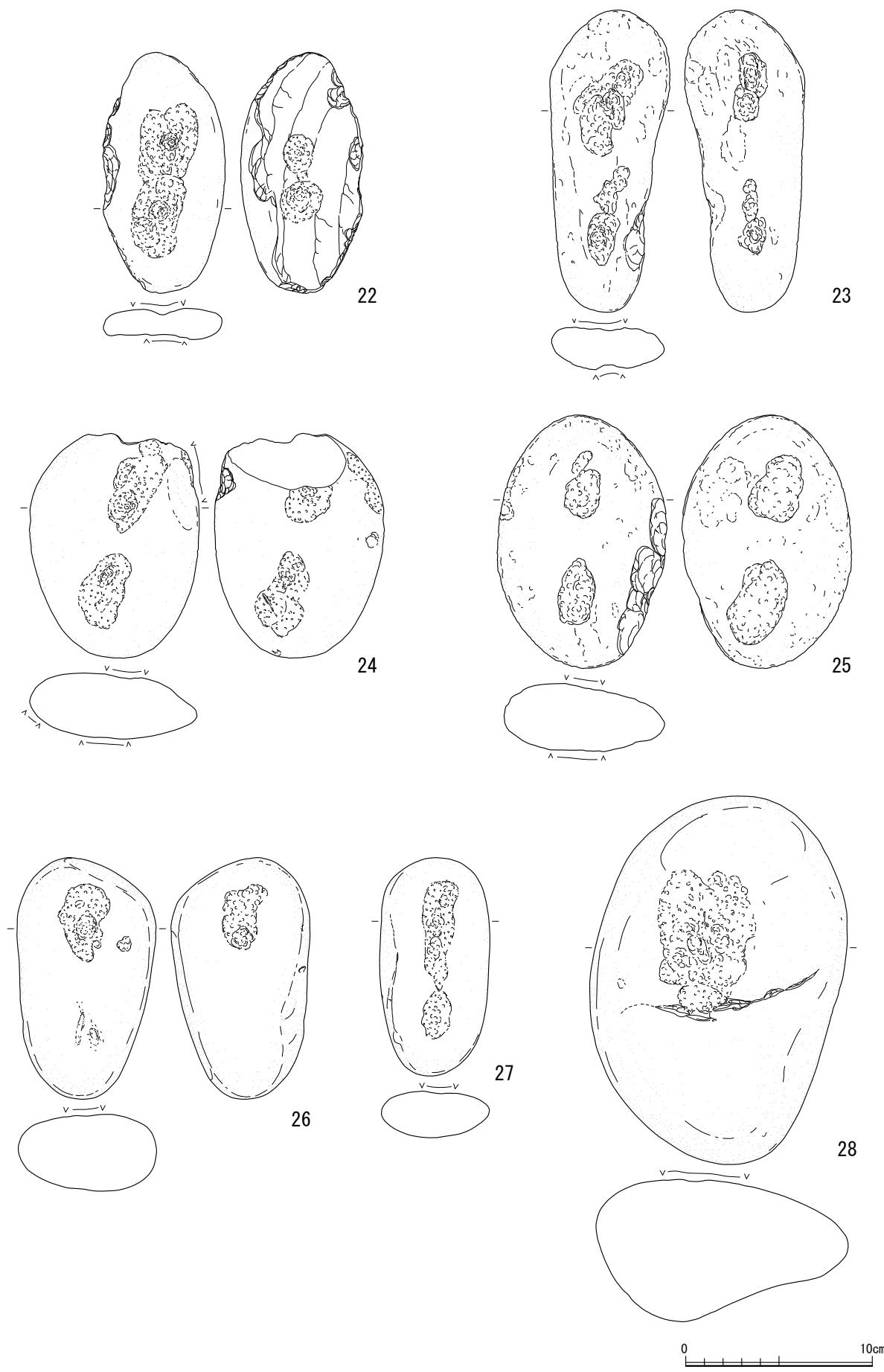
挿図番号	掲載番号	図版番号	遺構・グリッド	層位	分類	その他
図IV-4	1	7	G10	I	甕口縁部	口縁部の器厚は250mm ヤマセの屋号が繰り返し刻まれる
図IV-4	2	7	H10	I	50銭銀貨	昭和3年 大正11年～昭和13年まで発行
図IV-4	3	7	A地区	I	農耕用蹄鉄	鉄頭に16mmの台形状突起、鉄尾に高さ11mmの方形の突起がつく。 最大幅139mmあり農耕用の蹄鉄とみられる
図IV-4	4	7	A地区	I	農耕用蹄鉄	鉄頭に25mmの将棋の駒型の突起、鉄尾に高さ16mmの方形の突起がつく。 最大幅140mmあり農耕用の蹄鉄とみられる
図IV-4	5	7	A地区	I	蹄鉄	最大幅117mmで軽種馬の蹄鉄とみられる
図IV-4	6	7	A地区	I	ハミ環	鉄製の径99mmの環で、ハミ環とみられる
図IV-4	7	7	B地区	I	柄付の板状製品	水路跡から出土した昭和の遺物 367×70×15mmほど大きさで方形の上部四隅にくぎ穴がある



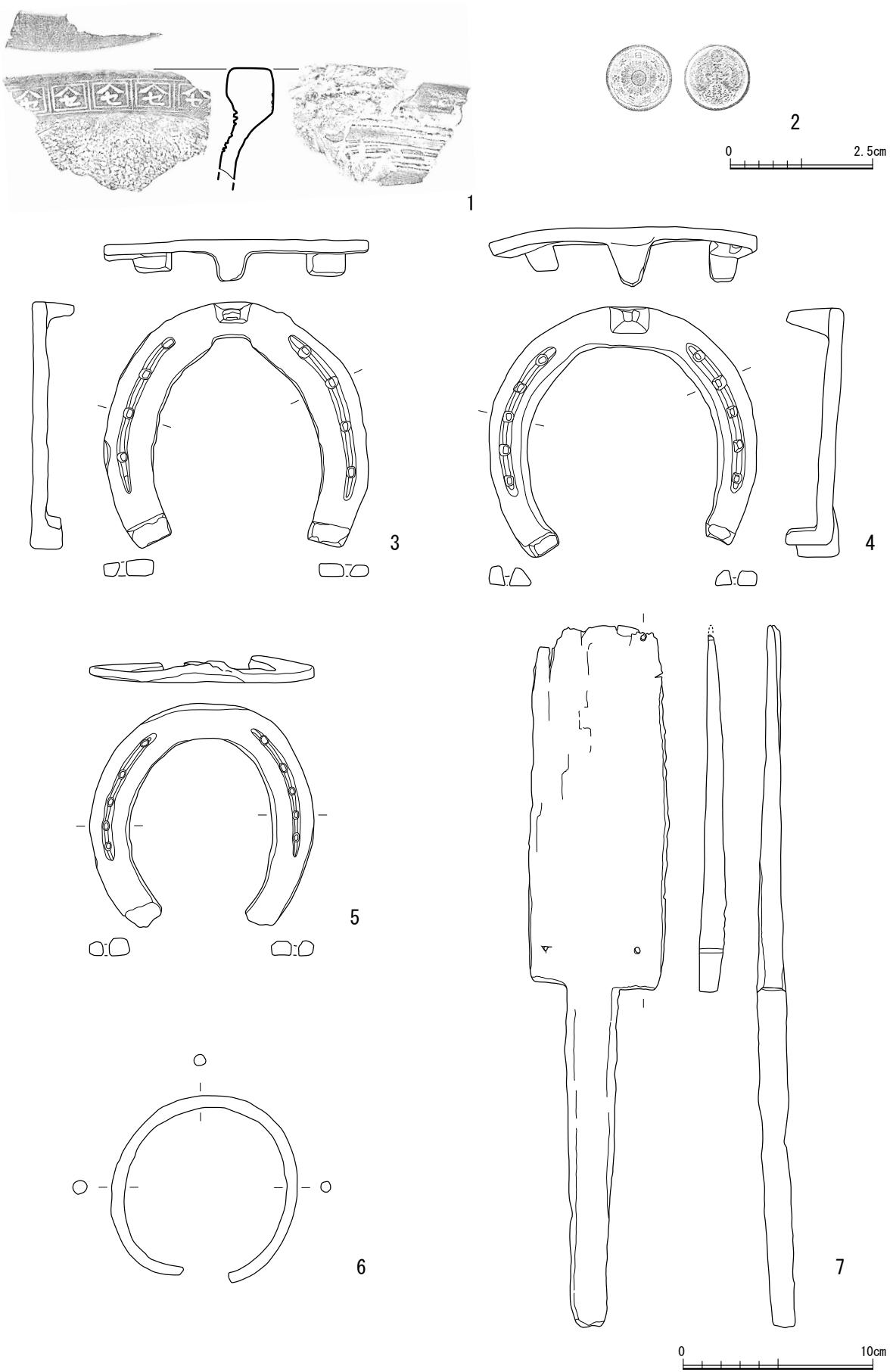
図IV-1 土器実測図



図IV-2 石器実測図 (1)



図IV-3 石器実測図 (2)



図IV-4 近現代の遺物

V 自然科学的分析

1 神森3遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

新ひだか町の神森3遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、F-1から採取された炭化クルミ核(試料No.1: PLD-54606)、F-5から採取された炭化クルミ核(試料No.2: PLD-54607)、BB-1から採取された炭化材(試料No.3: PLD-54608)の、計3点である。いずれも、縄文時代後期初頭と推定されている。

測定試料の情報、調製データは表V-1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表V-1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-54606	試料 No. 1 位置: I-11 層位: IV層 遺構: F-1	種類: 炭化種実 (炭化クルミ核) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-54607	試料 No. 2 位置: J-9 層位: IV層 遺構: F-5	種類: 炭化種実 (炭化クルミ核) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-54608	試料 No. 3 位置: J-11 層位: IV層 遺構: BB-1	種類: 炭化物・材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

3. 結果

表V-2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図V-1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

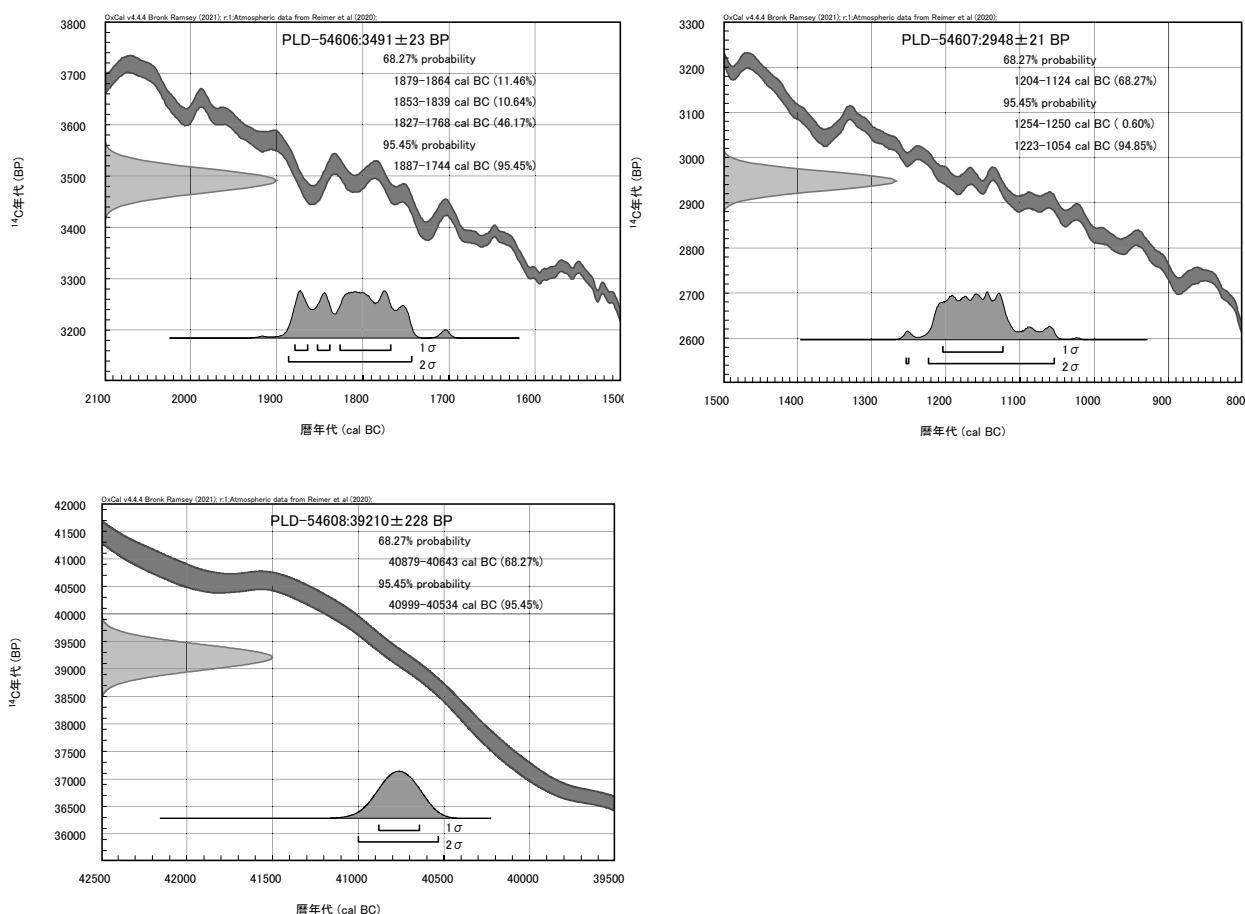
暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期

5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4 (較正曲線データ : IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表V-2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-54606 試料 No. 1	-23.92 ± 0.19	3491 ± 23	3490 ± 25	1879–1864 cal BC (11.46%) 1853–1839 cal BC (10.64%) 1827–1768 cal BC (46.17%)	1887–1744 cal BC (95.45%)
PLD-54607 試料 No. 2	-24.97 ± 0.21	2948 ± 21	2950 ± 20	1204–1124 cal BC (68.27%)	1254–1250 cal BC (0.60%) 1223–1054 cal BC (94.85%)
PLD-54608 試料 No. 3	-24.39 ± 0.19	39210 ± 228	39210 ± 230	40879–40643 cal BC (68.27%)	40999–40534 cal BC (95.45%)



図V-1 暦年較正結果

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の暦年代については、Omoto et al. (2010)を参照した。

F-1の試料No.1 (PLD-54606)は、1887–1744 cal BC (95.45%)の暦年代を示した。これは、縄文時代後期前葉に相当する。

F-5の試料No.2 (PLD-54607)は、1254–1250 cal BC (0.60%)および1223–1054 cal BC (94.85%)の暦年代を示した。これは、縄文時代晚期初頭に相当する。

BB-1の試料No.3 (PLD-54608)は、40999–40534 cal BC (95.45%)の暦年代を示した。これは後期更新世に相当する。本試料の測定結果は、推定される縄文時代後期初頭よりもはるかに古い時期を示しており、古い時代の炭化材が混入した可能性が考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337–360.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Omoto, K., Takeishi, K., Nishida, S. and Fukui, J. (2010) Calibrated ¹⁴C Ages of Jomon Sites, NE Japan, and Their Significance. *Radiocarbon*, 52 (2), 534–548.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

2 神森3遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

新ひだか町静内神森に所在する神森3遺跡から出土した縄文時代後期の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、遺跡より出土した黒曜石製石器3点である(表V-3)。時期は、縄文時代後期初頭と推定されている。

表V-3 分析対象

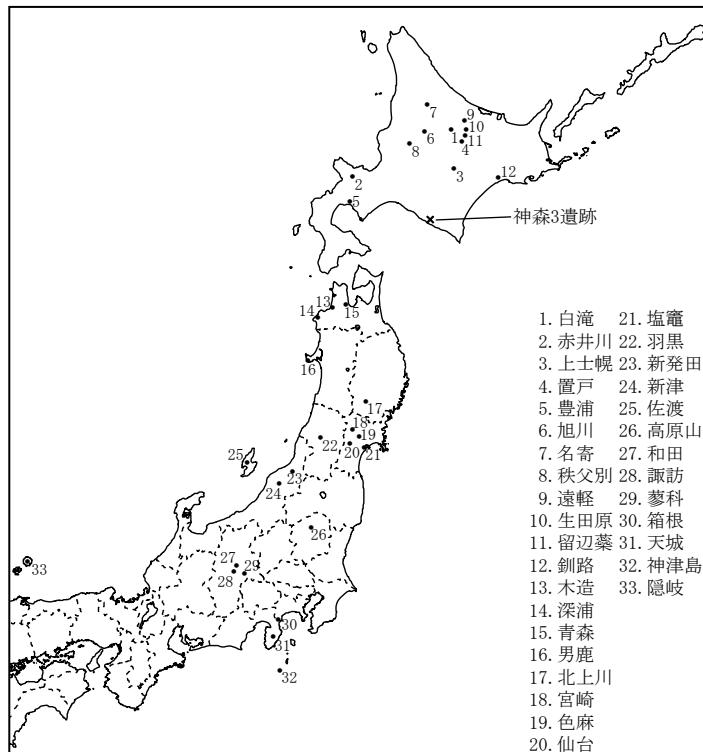
分析No.	グリッド	遺構	日付	層位	分類	推定時期	備考
1	I-12	—	20240531	IV	フレイク	縄文時代後期初頭	
2	I-11	—	20240702	IV	フレイク		原石面あり
3	J-11	FB-1	20240718	IV	チップ		8月23日土壤選別中

試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。

本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps : count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度 × 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)
- 3) Mn強度 × 100 / Fe強度
- 4) log (Fe強度 / K強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度 × 100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率 - 縦軸log (Fe強度 / K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。



図V-2 黒曜石産地分布図(東日本)

この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表V-4に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図V-2に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表V-5に石器の測定値および算出した指標値を、図V-3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするために、図では各判別群を橢円で取り囲んだ。

分析の結果、分析No.1が所山群(北海道、置戸エリア)、分析No.2が赤井川群(北海道、赤井川エリア)、分析No.3が赤井川群と上士幌群(北海道、上士幌エリア)の重複域の範囲にそれぞれプロットされた。

図V-3の判別図では、赤井川群と上士幌群の一部に重複があるため、分析No.3のように区別が困難な場合がある。

そのため、以下に示すY分率を算出している。

$$\text{Y分率} = \text{Y強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

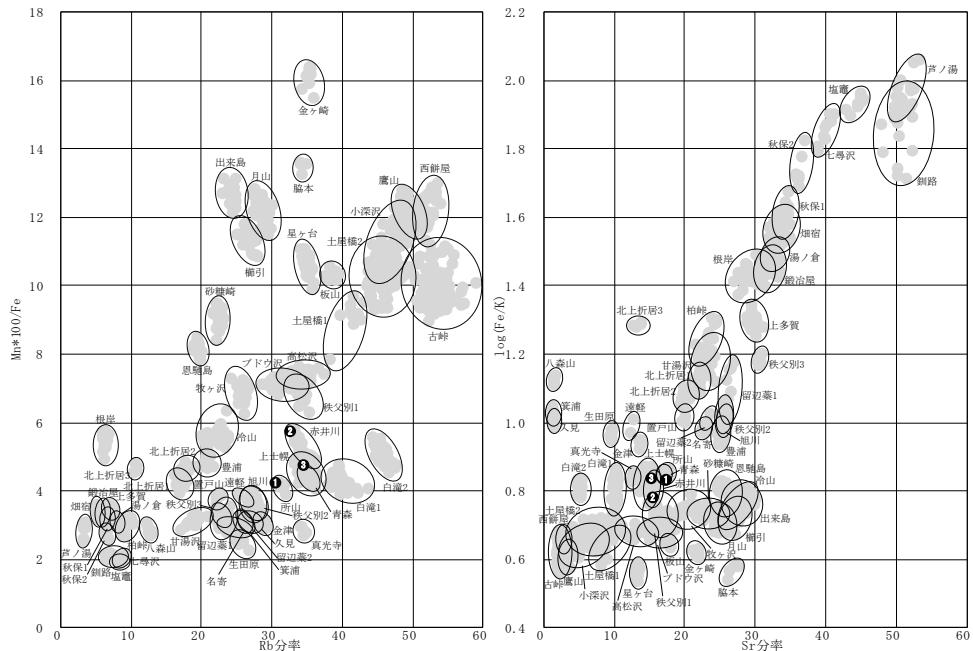
赤井川群と上士幌群、上士幌群と一部重複のある青森群の原石および石器について、横軸Y分率、縦軸Mn強度 $\times 100/\text{Fe強度}$ をプロットした判別図を図V-4に示す。図V-4において、分析No.2は赤井川群、分析No.3は上士幌群の範囲にプロットされた。

表V-5に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

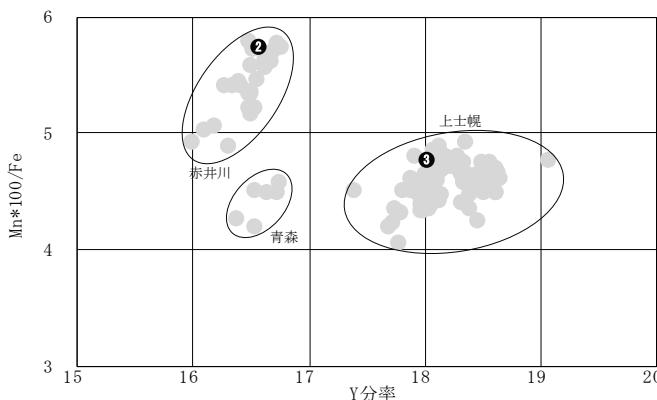
表V-4 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂 (43), 八号沢露頭 (15)	赤石山山頂, 八号沢
		白滝2	7の沢川支流 (2), IK露頭 (10), 十勝石沢露頭直下河床 (11), アジサイの滝露頭 (10)	露頭, 八号沢, 黒曜の沢, 幌加林道 (36)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川 (24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股 (4), タウシュベツ川右岸 (42), タウシュベツ川左岸 (10), 十三ノ沢 (32)	
	置戸	置戸山	置戸山 (5)	
	豊浦	所山	所山 (5)	
	旭川	豊泉	豊泉 (10)	
	名寄	旭川	近文台 (8), 雨紛台 (2)	
	秩父別	名寄	忠烈布川 (19)	
	秩父別	秩父別1		
	秩父別	秩父別2	中山 (65)	
	遠軽	秩父別3		
	生田原	遠軽	社名淵川河床 (2)	
	留辺蘿	生田原	仁田布川河床 (10)	
青森	留辺蘿	留辺蘿1	ケショマップ川河床 (9)	
	留辺蘿	留辺蘿2		
	鉄路	鉄路	鉄路市営スキー場 (9), 阿寒川右岸 (2), 阿寒川左岸 (6)	
	木造	出来島	出来島海岸 (15), 鶴ヶ坂 (10)	
	深浦	八森山	岡崎浜 (7), 八森山公園 (8)	
	青森	青森	天田内川 (6)	
	秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)
			脇本	脇本海岸 (4)
	岩手	北上川	北上折居1	
		北上川	北上折居2	北上川 (9), 真城 (33)
			北上折居3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉 (40)	
	色麻	根岸	根岸 (40)	
	仙台	秋保1	土蔵 (18)	
		秋保2		
	塩竈	塩竈	塩竈 (10)	
山形	羽黒	月山	月山莊前 (24), 大越沢 (10)	
		櫛引	たらのき代 (19)	
	新発田	板山	板山牧場 (10)	
	新津	金津	金津 (7)	
新潟	佐渡	真光寺	追分 (4)	
		甘湯沢	甘湯沢 (22)	
	板木	高原山	七尋沢	七尋沢 (3), 宮川 (3), 枝持沢 (3)
長野		西餅屋	芙蓉バーライト土砂集積場 (30)	
		鷹山	鷹山 (14), 東餅屋 (54)	
		小深沢	小深沢 (42)	
	和田	土屋橋1	土屋橋西 (10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北 (20), 土屋橋北西 (58), 土屋橋西 (1)	
		古峰	和田峠トンネル上 (28), 古峰 (38), 和田峠スキー場 (28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢 (20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下 (20)	
		高松沢	高松沢 (19)	
		諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (35), 星ヶ塔 (20)
		蓼科	蓼科	蓼科 (20), 麦草峠 (20), 麦草峠東 (20)
			芦ノ湯	芦ノ湯 (20)
神奈川	箱根	畠宿	畠宿 (51)	
		銀治屋	銀治屋 (20)	
		上多賀	上多賀 (20)	
静岡	天城	柏峠	柏峠 (20)	
		恩馳島	恩馳島 (27)	
東京	神津島	砂糠崎	砂糠崎 (20)	
	島根	久見	久見パーライト中 (6), 久見採掘現場 (5)	
		箕浦	箕浦海岸 (3), 加茂 (4), 岸浜 (3)	

新ひだか町 神森3遺跡



図V-3 黒曜石産地推定判別図(1)



図V-4 黒曜石産地推定判別図(2)

表V-5 測定値および産地推定結果

分析 No.	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	$\frac{Mn+100}{Fe}$	Sr 分率	$\log \frac{Fe}{K}$	Y 分率	判別群	エリア	分析 No.
1	280.9	81.2	1912.9	885.9	501.4	423.9	1091.7	30.52	4.24	17.27	0.83	14.60	所山	置戸	1
2	282.6	98.5	1714.6	763.5	361.3	388.4	832.5	32.55	5.75	15.40	0.78	16.56	赤井川	赤井川	2
3	72.1	23.6	496.1	176.7	77.8	92.6	166.8	34.38	4.77	15.14	0.84	18.02	上士幌	上士幌	3

4. おわりに

神森3遺跡より出土した黒曜石製石器3点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、それぞれ赤井川、上士幌、置戸エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦(1999)上和田城山遺跡出土の黒曜石产地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇一」: 172-179, 大和市教育委員

VI まとめ

神森3遺跡では低位段丘上の標高8m付近、黒色土層下のシルト質漸移層から、縄文時代後期前葉の焼土や集石、一括土器、フレイク・チップ集中などが検出された。出土した土器は全部で10個体程度とみられるが、このうちの一括出土個体や口縁部片、特徴のある胴部片の7個体を報告した。これらの土器の特徴は、胎土に多量の砂粒を含み、内面の口縁部付近に地文が施されている個体が3例、器面に縄線文や縄端部の刺突文が施されるものが2例、タガ状の添付帯が付されるのが1例、口唇に突起があるものが1例などの特徴から、道央部に分布するタブコプ式に相当するとみられる。

出土遺物はA地区全般とB地区の一部から出土しているが、主にグリッドI・J列を中心に出土し、検出された7カ所の焼土のうちの6カ所や、集石(SB) 1カ所・フレイク・チップ集中(FB) 2カ所、土器集中(PB) 3カ所、焼骨集中(BB) 1カ所もI・J列から検出されている。

焼土はすべてフローテーションをおこない、各焼土から炭化物を採取、一部は分析した。

F-1とその周囲、焼骨集中(BB)からはシカの焼骨細片や炭化クルミが得られた。F-1・5やBB-1からは種子も得られたが、炭化してないため現生の混入とみられる。FB-1・2からは1cm未満の黒曜石のチップが土壤選別で得られた。FB-1からは195点、FB-2から288点が回収された。ここでは石器の調整が行われたようである。集石1 (SB)は一部拡張した範囲に入り、PB-3と並ぶ。検出された23個の礫のサイズは平均で69.5 × 38.1 × 29.6mmで重量は82.3gであった。全般に長細い礫で編み物などの錘に使用されたものとみている。

縄文時代後期前葉の低位段丘上は静内川の河原で狩猟を行うさいのキャンプサイトであったと推測される。同時期の遺物は町内では静内川の対岸、標高60～70mの真歌公園遺跡(静内町教委1979)で出土している。また近隣では、同じ日高自動車道工事で、平成24・25年に調査した門別町のマウタサップ遺跡で北筒式や余市式が報告されている。直接の関係は不明だが、集落はより標高の高い場所にあったと考えられる。

B地区の低地からは土坑が1基検出された。上部にUs-b火山灰とⅢ-1層が落ち込む埋め戻しの見られない土坑で、Ⅲ-2層付近から掘られている。このような土坑は道央部では縄文時代晚期から続縄文時代にかけてみられるものだが、多くの場合、成人墓の周辺に多数掘られる。単独例は見たことがないため、西側に続く可能性もある。

時期は、縄文時代後期前葉より新しいが、遺物を伴っていないため具体的な時期は不明である。

ただ、付近の包含層のⅢ-3層から唯一の遺物である石鏃が出土している。形状は無茎で凹基で、この形の石鏃は、縄文時代後期以降では晚期後葉まで現れない。

土坑はこの石鏃出土層よりも上層から掘り込まれているため、続縄文時代以降の土坑である可能性が高いと考えられる。

この土坑から約290m南東の標高5m地点に中野7番地遺跡がある。土地を重機で整備中に発見された遺跡で、後北C₂D式、北大式、擦文式土器などのほか粘土中に直径1m前後の土坑が数基確認されている。約1km南南東には営林署裏遺跡がある。家を建てる際の土台柱穴から完形品の擦文土器が回収されている。静内川流域の低地はすでに宅地化が進んでおり、遺跡の発見も偶然が重なった結果ではあるが、より新しい時期の遺跡は静内川沖積地に存在する。

引用・参考文献

- 河野広道・藤本英夫 1953 『御殿山ケルーン群発掘調査報告』静内町教育委員会 郷土研究部編集
- 河野広道・藤原敏郎・藤本英夫 1954 『静内町先史時代遺跡調査報告』静内町町史資料第1集 静内町役場
- 河野広道「北海道の土器」『郷土の化学No.23』1959
- 河野広道・藤本英夫「御殿山墳墓群について」1961『考古学雑誌 第四十六卷第四号』日本考古学会
- 竹内理三 1987『角川日本地名大辞典』I 北海道 上巻 地名編
- 中田幹雄 1965 「トビノ遺跡緊急発掘調査報告」静内町教育委員会
- 橋本 晋 静内町立静内中学校教諭 1974 『真歌山テニスコート予定地発掘調査報告書』静内町教育委員会
- 橋本 晋・山田一孝・田畠隆章・吉沢弘道 1977 『静内町埋蔵文化財緊急分布調査報告書』静内町教育委員会
- 橋本 晋 1978 『ロクマップ2遺跡』静内町教育委員会・日高中部衛生施設組合
- 橋本 晋 1979 『駒場6遺跡』静内町教育委員会
- 橋本 晋 1979 『真歌公園遺跡』静内町教育委員会
- 藤本英夫「シベチャリのチャシ発掘報告 第1次調査」1964『ひだか』16号 北海タイムス教育賞受賞記念号
- 藤本英夫「御殿山ケルーン群墳墓遺跡について」1961季刊『民俗学研究』
- 藤本英夫「日高における縄文時代末期の墳墓」1960『北海道考古学誌 第1巻 第1号』北海道埋蔵文化財調査会
- 藤本英夫「静内町田原小学校庭遺跡發くつについて」1957
- 藤本英夫「静内町田原遺跡について」1958「せいゆう」4号 静内高等学校生徒会誌
- 藤本英夫「先史時代」1963『静内町史』静内町役場
- 藤本英夫編 1963『G O T E N Y A M A』北海道教育委員会
- 藤本英夫 1971『北の墓』學生社
- 古原敏弘 1982『駒場7遺跡における考古学的調査』静内町教育委員会
- 古原敏弘 1983『ポンペラリチャシ遺跡』静内町教育委員会
- 古原敏弘 1984『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査その2』静内町教育委員会
- 古原敏弘 1985『静内町清水丘における考古学的調査』静内町教育委員会
- 藪中剛司・齊藤大朋 2000『真歌14遺跡発掘調査報告書』静内町教育委員会
- 厚真町教育委員会 2013『ライカルマイ遺跡』
- 道道上幌内早来停車場線特改1種工事(道州)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 小樽市教育委員会 1990『蘭島餅屋沢遺跡』
- 静内町役場 1963『静内町史』
- 静内町役場 1975『静内町史』増補改訂版
- 日高町教育委員会 2014『マウタサップ遺跡・ケノマイ2遺跡』
- 日高自動車道門別厚賀道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査 日高町埋蔵文化財調査報告書 第3集
- 北海道静内高等学校文化人類学部 1978『25周年記念誌 郷土史研究部 文化人類学研究部』
- 門別町教育委員会 1979『日高門別の先史遺跡』-沙流郡門別町埋蔵文化財発掘調査報告書-
- 苫小牧市埋蔵文化財センター 1991『静川37遺跡』
- 苫小牧教育委員会・苫小牧埋蔵文化財センター 1984『タブコブ』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1982『ママチ遺跡』北埋調報9
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1986『ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報36
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2009『西島松2遺跡』北埋調報265
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017『厚真町オニキシベ3遺跡』北埋調報346
- 『ひだか2号』1957 静内高校郷土史研究部
- 『ひだか・ケパウ合本5号』1959 静内高校郷土史研究部・日高郷土研究ケパウの会
- 『ひだか21号』1970 静内高校文化人類学研究部

写 真 図 版

図版 1



A 地区清掃状況



B 地区表土除去 Us-b 面検出



G 10 区トレンチ断面



I 12 区東側断面



B 地区低地断面



III層上位に B-Tm の入る低地断面



低地と低位段丘の境断面



B 地区低位段丘上の断面

調査状況（1）



B地区トレンチ調査状況



B地区北東面清掃状況



G・H 10区調査状況



L 7区掘削状況



PB-1 調査状況



PB-1 出土状況



I 12区 SB-1 ほか遺物出土状況



I 12区 PB-3 出土状況

調査状況（2）

図版 3



P-1 検出状況



P-1 断面



I 11 区 F-1 と周辺の遺物検出状況



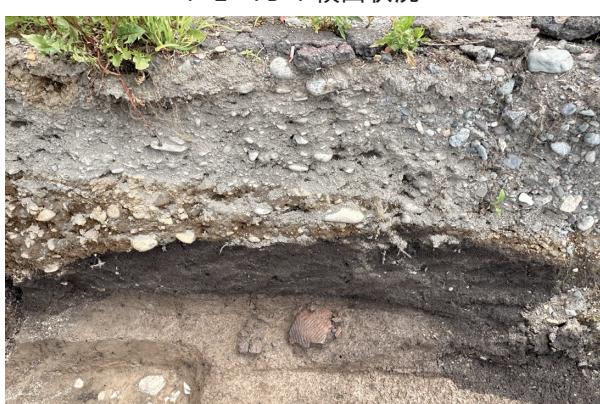
F-1 断面



F-2・PB-1 検出状況



F-3・F-5・F-6 検出状況



アスファルト下出土土器



K・L 9 区出土土器

調査状況（3）



L 6区III-3層遺物出土地点



L 6区III-3層出土石鏟



L 12区出土土器



I 11区たたき石出土状況



乾燥を防ぎながらの包含層調査



A地区調査終盤の状況



A地区完掘



B地区完掘

図版 5

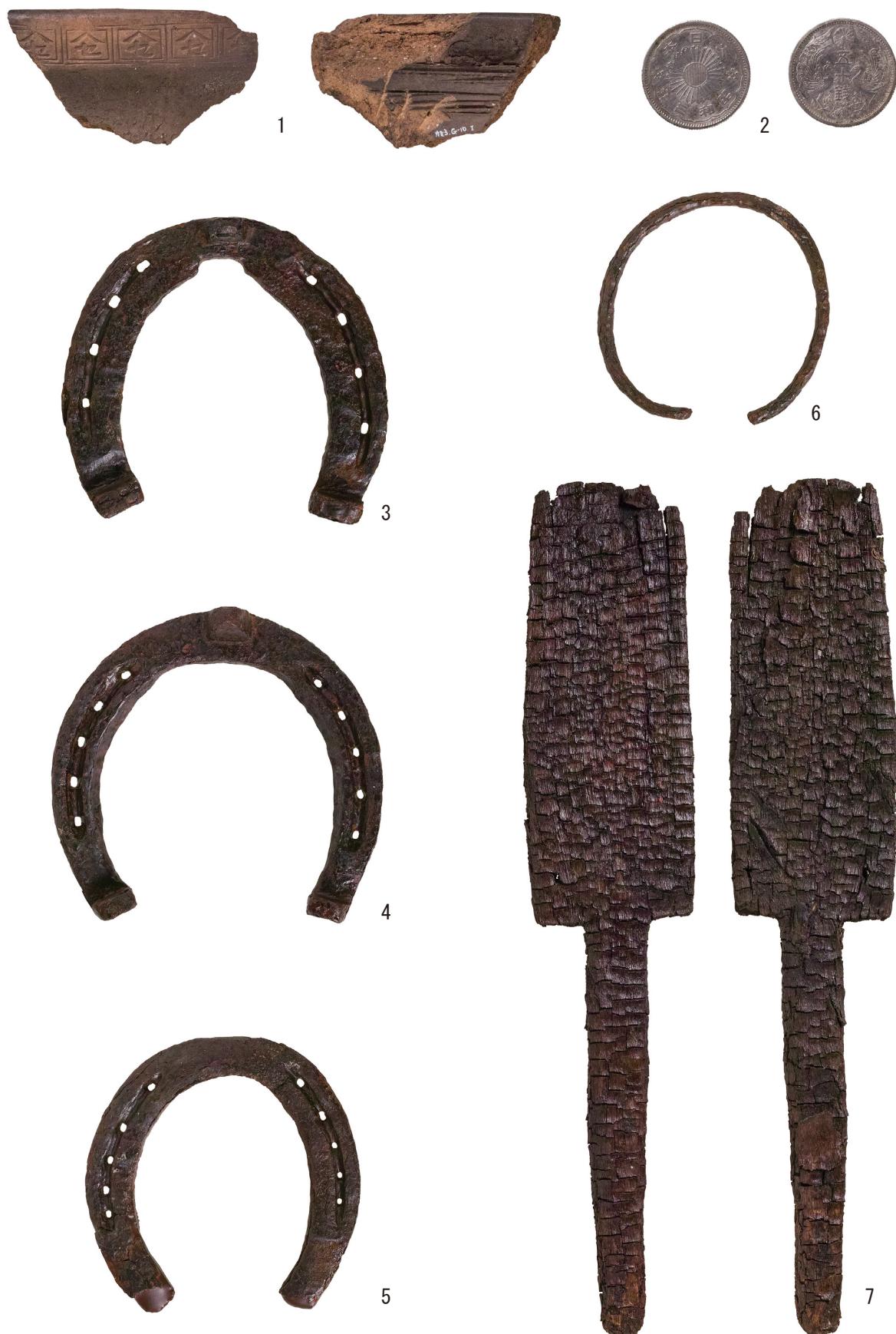


土 器



石 器

図版 7



近現代遺物

報告書抄録

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第381集

新ひだか町 神森3遺跡

— 日高自動車道厚賀静内道路建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発 行 令和7年3月21日
編 集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌658番地1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3231
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
印 刷 株式会社横山プリントサービス社
〒063-0830 北海道札幌市西区発寒10条12丁目1-54
TEL (011)669-3915 FAX (011)669-3916